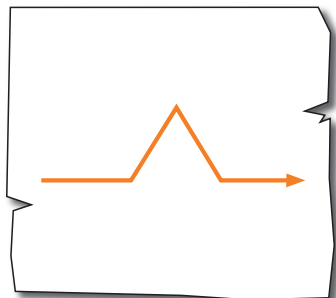


THE 7 FRAMES FOR LIFE

7つのワクワク枠

みんなのコンパス③

第7フレーム



木 岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

何十倍、何百倍も
うれしいのです。

恋人^る溜^ね音、おじいさん…と愛し合う
青年期さんぽのフルーツフル果実物語

SAMPO FRUITS



みんなのコンパス③



プロローグ

232

るね こうふん ぎ み はな
溜音は興奮気味に話した。「すごいじゃない！ ついにナゾが解
けたじゃない！

きっと、これらこそが探し求めた“究極の意味”よね？

しゃかいげんしょう とうしんだい じんせいげんしょう ずのう しこうげんしょう
マクロの社会現象も、等身大の人生現象も、頭脳の思考現象も、
しんしん かんじょうげんしょう しんたい せいり げんしょう せいめいげんしょう
心身の感情現象も、身体の生理現象も、ミクロの生命現象も… そ
れに、ライフ現象だけでなく、ぶつりがく かがく あつか ぶつしつげんしょう
物理学や化学が扱う物質現象も——
しゃかいがく じんぶんがく しぜんがく
社会科学も人文科学も自然科学も——

つまりは、ぶんもりも、きょうつうのどだいうえ せつめい
つまりは、文も理も、共通の土台の上で説明できるんですもの。

すごいことよ。きっと大発見よ！ 早く世の中に発表しましょう
よ！」

「——。——ほんとうに、これらだけでいいのだろうか？」と僕。

「え？ ——どうして？」

「だって—— まだ何かが足りないような気がするんだ」

「——え？」

「ちしき
知識アップだけでなく、やっぱりちえアップやフルーツ育てにも

貢献したいんだ。“世の中のみんなのためになって、みんなが満足
できるフルーツ”のような、おいしさにつなげたいんだ。

——山は越えたから、あとは、もうちょいさ」

「うん♪」

233

その日の晩、自分のアパートのベッドの上で仰向けになりながら、
あれこれ思いめぐらせた。

これまでの、第7フレームに加え——、

第1フレーム『カタチ コトバ カラダ アタマ』のすべて、

第2フレーム『カコ イマ ミライ』の中の『カコ』、

第3フレーム『→』、

第4フレーム『In Out』、

第6フレーム『Off On』を利用した考察が、メインだった。

知恵アップやフルーツ育てにつながることを考えるためには、きつ
と、第5フレーム『Against For』の中の『For』、および、第2
フレーム『カコ イマ ミライ』の中の『イマ』や『ミライ』が、
より大事になるだろう。

『イマ』——

自然破壊の問題

環境汚染の問題

極端な気候変動の問題

しゅ ぜつめつ もんだい
種の絶滅の問題

ささまざまな^{とうそう もんだい}闘争の問題

...

いろいろな^{もんだい}問題が、人間社会^{にんげんしゃかい}レベルのライフ、人間^{にんげん}レベルの
ライフを含む^{ぜんじんるい まえ やま ず}全人類の前に山積み^{ぜんじんるい}にされている。

それでは、『ミライ』はどうなるのだろう？

はたして、人間社会^{にんげんしゃかい}レベルのライフ、人間^{にんげん}レベルのライフを含む^{ふく}
全人類^{ぜんじんるい}は、このまま^{なが}長く^{そんぞく}存続できるのだろうか？

それとも——

...

いま^{いま}、みんなのために^{なに}何ができるのだろうか？

...

そして——

ふと、^{る ね}溜音^{かい わ}との会話^{とうじょう}で登場した“^{おも}かわいたちくん”^だことを思い出
したんだ。

ニホン・カワウソ——

^{ぜつめつ}絶滅^いしたと^{かれ}言われて^{かのじょ}いる彼女ら——

...

さらに、ランプベリーのことも^{おも}思い^だ出した。

ランプベリーとともに^す過^{しあわ}ごした^ひ幸せな^び日々——。

ランプベリーのおかげで^{たの}楽しさが^ま増^{おも}した^で思い出^でたち——。

ランプベリー

...

さらに、コンパース^{いつか}一家^{おも}のことも思い出した。

あの^で出会いは、いったい、何^{なん}だったのだろう？

あの^で出会いは、何を^{なに}意味^いしていたのだろう？

彼^{かれ}ら彼女^{かのじょ}らは、いったい何者^{なにもの}たちだったのだろう？

...

——あっ！

そのとき、ハッとしたんだ。

——そうだ！ 結局^{けっきょく}は、人間社会^{にんげんしゃかい}レベルのライフ^みまでしか見ていなかったんじゃないか？

——もし、地球^{ちきゅう}上のあらゆる生き物^{いもの}たちを含む^{ふく}、すべてのライフを^{しんか}“進化^{さいぜんせん}の最前線^み”と見^みなしたら、どうなるだろう？

ほかの生き物^{いもの}たち、ほかの種^{しゅ}も視野^{しや}に入れることで初めて^{はじ}見える^み何か^{なに}。人間社会^{にんげんしゃかい}レベルよりも、さらにズーム・アウトすることで初めて^{はじ}見える^み何か^{なに}。…

それらも、きっと、あるはずだ！

この方向^{ほうこう}づけは、考え^{かんが}が加速^{かそく}的に^{てき}深^{ふか}まるきっかけとなった。

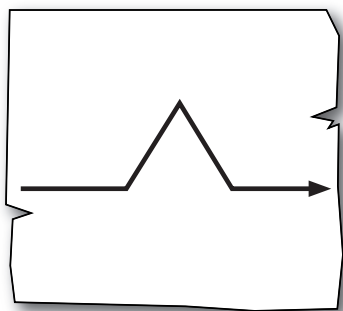
それなりの成果^{せい}へと熟^{じゅく}すまで、時間^{じかん}はあまりかからなかった。

音楽——テーマ曲イン

♪美^{うつく}しき自然^{しぜん} Beautiful Nature

タイトル流^{なが}れて

第7フレーム



234

音楽イン ♪春 Spring

桜が満開となったのは、それから一週間ほど経ってからだった。

その満開のタイミングに、ふたりの都合が合ったので、瑠音と僕は、お花見デートをすることにした。陽光に透ける桜の花びらたちは、瑠音の魅力を増幅しているようにも思われた。

お花見デートのゴール地点は、春の海辺だった。

浜辺に座っているふたり——。

ちょうど、そこはコンパース一家と別れた場所でもあった。

ザブーン、ザザザシュー …

「そう言えば、あの成果、楽しみよね。あれから、私、どうなるか、ずっと楽しみにしていたわ」と瑠音。

「ありがとう。——あれから、あれこれ考えたよ。そしたら——意外と早く見つかっていたよ」と僕。

「何が？」

「人間社会レベルの3ステップスからズーム・アウトすると見える、さらに高次レベルの3ステップス——」

「え？ ——知りたい。知りたい♪」

「うん。順を追って説明するよ。」

まず、「人類という種を構成する人間」どうしが関わり合うことで人間社会レベルの3ステップスが成立するように、「動物や植物、細菌などの種を構成する個体」どうしが関わり合うことで個体社会レベルの3ステップスが成立する——」

「^{こ たいしゃかい}個体社会レベル——」

「そうさ。この^{こ たいしゃかい}個体社会レベルの3ステップスは、アリやハチなどの^{しゃかいせいこんちゅう}社会性昆虫とか、チンパンジーやゴリラなどの^{しゃかいせい}社会性の高い^{たか れいちょう}霊長類とかを構成する^{るい こうせい}個体^{こ たい}どうしの間^{あいだ}だけで成立^{せいりつ}するとは限らないよ。

少なくとも、^{すく りょうせいせいしよく}両性生殖するならば、すなわち、“オスとメス”の^{かか あ ほんしよく}関わり合いで繁殖するならば、^{すく じてん こ たい}少なくともこの時点で個体^{こ たい}どうしがかかあ^{かか あ}関わり合っているわけだから、これだけで^{こ たいしゃかい}個体社会レベルの3ステップスが成立^{せいりつ}していることになる。まあ、これは、わりとイメージしやすい^{おも}と思うけど——」

「——」 ^{さくら はな}桜の花びらのように、^{いろ}かすかに色づく^{かのじょ ほお}彼女の頬——。

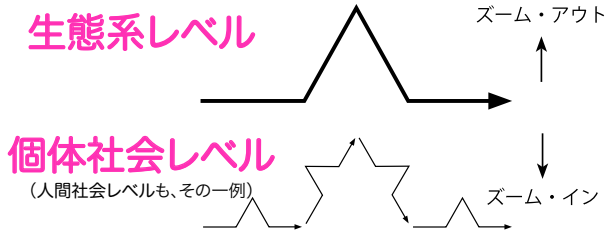
「って、別にイメージしなくてもよくて——」 あわててフォローし、
^{はなし つづ}話を続けた。「たとえ、^{む せいせいしよく せいぶつ}無性生殖の生物であっても、^{こ たいしゃかい}個体社会レベルの3ステップスが成立^{せいりつ}しているよ。なぜって、^{む せいせいしよく せいぶつ}無性生殖の生物^ぼの場合^{あひ}も、ある個体^{こ たい}が生殖^{せいしよく}し続けられるかどうか、^{えいようぶん にっこう}栄養分や日光などのエネルギー^{かざ}が限られているがゆえに、^{しゅう い ぞんざい どうしゆ こ たい}周囲に存在する同種の個体^{そんざい えいしよく}の存在に影響^{えいしよく}されることになるのだから」

「——つまり、生殖^{せいしよく}していれば、有性^{ゆうせい}か無性^{む せい}かに関係なく、あらゆる^{しゆ}種^{こ たいしゃかい}において個体社会レベルの3ステップスが成立^{せいりつ}しているのね？」

「その通り。だから、この^{こ たいしゃかい}個体社会レベルの3ステップスの一例として、^{にんげんしゃかい}人間社会レベルの3ステップスも含まれているよ」

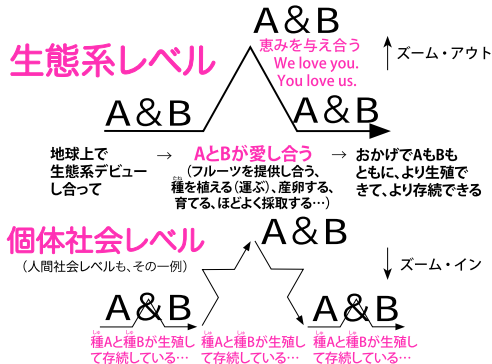
「——ええ、そうね」

「それで、いよいよ、この^{にんげんしゃかい}“人間社会レベルを含む^{こ たいしゃかい}個体社会レベルの3ステップス”からズーム・アウトすれば、さらに^{こうじ}高次レベルの3ステップス、^{せいいたいけい}生態系レベルの3ステップスが見えてくるんだ」



「^{せいたいけい}生態系レベル——」

「そう。——^{たと}例えば、^{しゅ}種 A と ^{しゅ}種 B が ^{ささ}支え合って ^あ成立している ^{せいたい}生態系レベルの 3 ステップスは、次のように示すことができるよ」



「この^{せいたいけい}生態系レベルの 3 ステップスも、^{にんげんしゃかい}人間社会レベルの 3 ステップスと、よく似ているね」

「そうさ。フラクタル的^{てき}に相似^{そうじ}だからね。」

だから、^{せいたいけい}生態系レベルのライフの成立——^{せいりつ}誕生や^{たんじょう}存続^{そんぞく}を決めるカ

ギの 1 つは、やっぱり、『Love - Love の^{かんけい}関係』の構築^{こうちく}なんだよ。

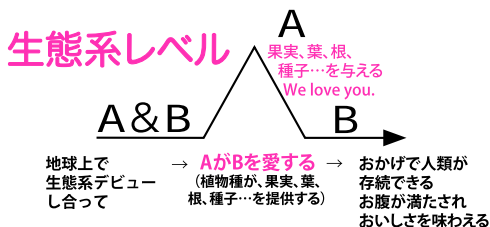
^{にんげんしゃかい}人間社会レベルのライフのときと^{どうよう}同様に——」

「『Love - Love の^{かんけい}関係』♪」

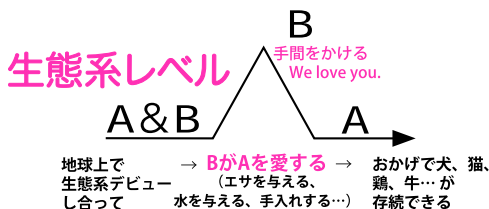
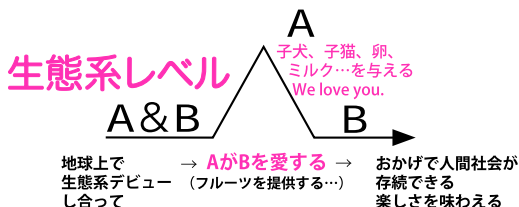
音楽 ♪ 春 Spring 235 に続く

235

「例えば——」と話し始める僕。「果実類や野菜類、穀類や豆類など、恵みを与えてくれる植物種と、人類という種の支え合いとか——



飼い犬や飼い猫のおかげで楽しみが増えるとか、乳牛や鶏のおかげでケーキが食べられるとか… 恵みを与えてくれる動物種と、人類という種の支え合いとか——



さらには、乳酸菌やビフィズス菌、表皮ブドウ球菌を含む、恵み
 を与えてくれる細菌類の種と、人類という種の支え合いとか——」



「へえー。つまり—— ある種とある種の間の恵みの与え合いが、
 『Love - Love の関係』の構築を実現していて—— そのおかげで、
 生態系レベルの3ステップスが成立しているのね？」と囁音。

「その通りさ。この『Love - Love の関係』の構築のおかげで、生
 態系レベルのライフが誕生し、存続しているのさ」

「このことが、人間社会レベルのライフの場合と似ているのは、ま
 さにフラクタル的に相似だからなのね？ ♪」

「その通り！」

音楽 ♪春 Spring 236 に続く

236

「生態系レベルの3ステップの意味についても、第4フレームから第6フレームまでを考え合わせると、わかりやすくなるよ」と僕。



「ええ、よくわかる気がする——」。

それぞれのステップの意味についても、人間社会レベルの3ステップの場合とフラクタル的に相似なんでしょ？」と溜音。

「そう、まさに、その通り！」

だから、例えば、第1ステップは—— まさに、人間社会レベルにローカルなものとグローバルなものりょうほうの両方があるのと同じように、生態系レベルにもローカルなものとグローバルなものりょうほうの両方あることを意味しているんだよ」

「アハッ♪ やっぱり——」

「この『In Out』は、関わり合う種が、どれだけ広く分布してい

るかってこと、いわば、^{ぶんさんど}分散度^{しゆ}を示しているんだ」

「あ！ そうすると—— ^{たと}例えば、^{じんるい}人類という種^{しゆ}は、^{みなみ}南の果てから
^{きた}北の果てまで^{せいそくち}生息地^{かくだい}を拡大しながら、^{しゆ}ほかのさまざまな種^{ひろ}と広く関
わっているから、どちらかと言ったら『Out』の方向^{ほうこう}にいるのね？」

「そうだね。」

さらには、^{せいそくち}生息地の広がり^{ひろ}に関係なく、^{たと}例えば、^{じんるい}人類がもたらす
^{たいきちゆう}大気中の^{にさんかたんそ}二酸化炭素^{さんそ}や^{のうど}酸素^{へんどう}の濃度^{えいきよう}の変動^{ちきゆうぜんたい}の影響^{およ}が地球全体に及びう
るという意味でも、^い人類^{じんるい}は『Out』の方向^{ほうこう}にいると思うよ」

「——そうすると、^{せいそくち}生息地^{かぎ}が限られていても、^{しよくぶつしゆ}植物種^{さん}がもたらす酸
素^{にさんかたんそ}や^{のうど}二酸化炭素^{えいきよう}の濃度^{ちきゆうぜんたい}の影響^{およ}も地球全体に及びうるから、その意味
で^{しよくぶつしゆ}植物種^{ほうこう}も『Out』の方向^{ほうこう}にいるのね？」

「そうさ。だからこそ、“地球上のすべての生き物や地球環境を含
む、^{ぜんたい}まるごと全体^{せいたいけい}が1つの生態系^みレベル^みのライフである”という見
方^{かた}も成り立つんだよ。まあ、それが^{せいたいけい}グローバル生態系^{せいたいけい}ってやつだね」

「——じゃあ、^{せいたいけい}グローバル生態系^{ぎゃく}の逆^{せいたいけい}が、ローカル生態系^{せいたいけい}なのね？」

「そうさ。^{たと}例えば、^{くだもの}果物^{ぼく}と^{かんけい}僕^{ぼく}の関係^{かんけい}、^なランベリー^{なか}と^{なか}僕の関係^{なか}、^{せい}お腹^{せい}の中の細菌^{せい}と^{せい}僕の関係^{せい}…… ^{せい}が、ローカル生態系^{せい}だよ」

「よくわかるわ」

「うん。それで、第2ステップは—— ^{しゆ}ある種^{しゆ}が、^{めぐ}ほかの種^{きようい}へと
恵^{めぐ}み、^{あた}あるいは、脅威^{あた}を与えるってこと。

^ぐ具体的^ぐには——

“^{しよくぶつしゆ}植物種^{にさんかたんそ}が、^{きゆうしゆう}二酸化炭素^{さんそ}を^{つく}吸収^だして^{どうぶつしゆ}酸素^{どうぶつしゆ}を作り出して、動物種^{どうぶつしゆ}にとつ
^{ゆうよう}て有用^{くうき}な空気^{ていきよう}を提供してあげる”とか

“^{しよくぶつしゆ}ある植物種^{かじつ}が、^{みの}果実^{どうぶつしゆ}を^{しよくりゆう}実らせて、ある動物種^{ていきよう}に食糧^{ていきよう}を提供してあ

げたり、その動物種が、その果実の中の種を遠くへ移動させて、その植物種の生息地を拡大させてあげたりする”とか、

“ある植物種が、ある動物種に巣の材料を提供してあげる”とか…
恵みを与えたり——

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

いっぽう
一方で

音楽イン ♪冬 Winter

“ある動物種が、環境破壊や急激な気候変動を引き起こして、すべての種の生存を脅かしてしまう”とか

“ある動物種が、食糧となる生物を乱獲して減少させたり、その食糧となる生物の減少が、その動物種を飢餓によって減少させたりする”とか

“ある有害な種だけがが増えて、有用な種が減ってしまう”とか…
脅威を与えたりするってこと」

「——うん。そうすると、もちろん—— 恵みが『For』の方向なら、脅威が『Against』の方向なのね？」

「その通りさ。」

それで、例えば、人類という種は、ほかの、さまざまな種から、これまで実に多くの恵みを受け続けた。食糧、燃料だけでなく、空気や土壌、海… も含めて実に多くの恵みを」

「ええ、そうね。 そのおかげで繁栄できたのね」

「でも、それは多くの場合、人類が、ほかの、さまざまな種に対して、同時に単に脅威を与え続けていたということでもあった」

「え？」

「例えば、乱獲、樹木の乱伐、環境汚染、急激な気候変動… は、

じんるい 人類がもたらした脅威に相当するんだよ」

「——。——そうね。“かわいたちくん”たちにとっての、乱獲や河川環境の悪化… は、まさに人類による脅威だったのね」 彼女は、沈みながら言った。

「ああ」 僕も、沈みながら言った。

「——だから、第3ステップは、恵みや脅威を受けた種が“繁殖するか衰退するか”、“存続するか絶滅するか”… のような『Off On』で示される内容を持っているのね？」

「そうさ。もちろん、それは、いずれ“人類自身がどうなるか”ってことでもある」

「——え？」

音楽 ♪冬 Winter 237 に続く

237

「人類という種は、ほかの種に脅威を与え続ければ、ほかの種を衰退させてしまうだけでなく、ほかの種から脅威を与えられ続けることによって、いずれ自身が衰退してしまうってことさ。周囲に脅威を与え続けながらの繁殖は、一時的な偽の繁殖なのさ」と僕。

「いずれ自身が衰退してしまう、偽の繁殖——」と瑠音。

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

「そう。まあ、逆に言えば——

音楽イン ♪春 Spring

ほかの種に恵みを与え続ければ、ほかの種を長く繁殖させられるだ

けでなく、ほかの種から恵みを与えてもらい続けることによって、
自身も長く繁栄するってことさ。周囲に恵みを与え続けながらの繁
栄こそが、長期的な本物の繁栄なのさ」

「後半の逆にとらえた方の説明は、結局、『Love-Love の関係』が
作られれば、繁栄しやすくなるってことで、やっぱり人間社会レベ
ルの場合と似ているね？」

「そうさ。何せ、フラクタル的に相似だから——。

つまり、生態系レベルのライフを構成する各種がどれほど長く存
続できるかどうかについても、『Love-Love の関係』をどれほど構
築できているかが決定するんだよ」

「それは、恋愛関係や経済活動を含む人間社会レベルのライフを構
成する各個人がどれほど長く存続するかどうかについて、『Love-
Love の関係』をどれほど構築できているかが決定することと同じ
なのね？ フラクタル的に相似だから——」

「その通りだよ。

この『Love-Love の関係』の構築に、より成功した種が、より
長く存続すること—— これは、進化論の根幹である『Natural
Selection 〈自然淘汰 & 自然選択〉』の本質の 1 つだと思うよ。

そもそも自然選択のヒントとなった人為選択においても、まさに、
人類との『Love-Love の関係』を構築できた種が選ばれて生き残っ
ているわけだし—— ここにあるのは、ゆるぎない自然法則の 1 つ
なのさ」

「——ええ、言われてみれば、そうよね。実際、たとえ、さまざま
なハンディキャップを背負っておられても、『Love-Love の関係』

を構築することによって、大いに活躍されている方々が、たくさん
 いらっしゃるわけだし—— それに、生まれたばかりの赤ちゃんが、
 本来とっても“か弱い”のに生存し続けられるのは、やっぱり、そ
 の保護者と『Love-Loveの関係』を構築するからにほかならない
 わけだし—— 確かに、それは、的を得た説明だと思わ

「そうだね」 そう同意した後、ふいに、コンパルンクルが赤ちゃん
 だった頃のことを思い出した。——か弱い！？

「——ま、コンパルンクルちゃんの赤ちゃん時代は、例外だけだね。

アハハッ♪」

「アッハッハッ！」 笑い合うふたり——

『Love - Love の関係』の

構築——

これを達成している存在が

なが 長く存続する

238

瑠音と僕は、しばらく、ぼんやりと水平線の方を眺めていた。

「『Love-Loveの関係』の構築が長い存続につながることは、地球上の生態系レベルのライフや人間社会レベルのライフだけに限らず、さらに広い範囲で成り立つ可能性がありそうだよ」僕は、意を決して言ってみた。

「——え？ さらに広い範囲？」聞き返す瑠音。

「そう。——これから、あくまで“もしも”の話をするよ。

“もしも”の——」

「ええ、なあに？」

「もしも——あのコンパース一家、あるいは、その祖先たちの出身が、ほかの天体の生態系だったとするよ」思い切って話してみた。

「——」きょんとしている瑠音。

「もちろん、彼ら彼女らの出身が地球の生態系である可能性もあるから、あくまで、“もしも”の話だよ」

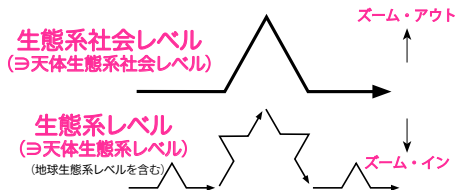
「——ええ、“もしも”の話ね。“もしも”の——」と言いながら数回うなずく彼女。

「もしも、あのコンパース一家、あるいは、その祖先たちの出身が、ほかの天体の生態系だったら、どうなるか？」

「——どうなるの？」

「もしそうだったら、天体生態系社会レベルを含む、生態系社会レベルの3ステップを考えられることになるのさ。

それは、^{せいたいけい}生態系レベルの3ステップスからズームアウトすることによって^み見えてくるレベルだね」



「——コンパース一家^{いつ か}って異星人^{い せいじん}たちだったの! ?」^{る ね}瑠音は、^{おどろ}驚きながら言った。

「ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ… だから、僕^{ぼく}にもわからないよ。あくまで“もしも”^{はなし}の話だよ。“もしも”の——」

「ええ、“もしも”のね。“もしも”の——」^{ふたた}再びうなずきを繰り返^くす彼女^{かのじょ}。

「僕^{ぼく}が言^いいたいのは、生態系社会レベルのライフという“もしも”^{はなし}の話においても、『Love-Love^{かんけい}の関係』を構築^{こうちく}できる存在^{そんざい}こそが長^{なが}く存続^{そんぞく}するという結論^{けつろん}が変^かわらないってことさ」

「——」

「なぜって、フラクタル^{てき}的に相似^{そうじ}だから——」

「——」

「それに、実際^{じっさい}、僕^{ぼく}らの関係^{かんけい}がコンパース一家^{いつ か}のおかげで長^{なが}く存続^{そんぞく}している一面^{いちめん}も、コンパース一家^{いつ か}が僕^{ぼく}らののおかげで長^{なが}く存続^{そんぞく}している一面^{いちめん}も、まさに、もしもの生態系^{せいたいけい}社会^{しゃ}レベルにおいても『Love-Love^{かんけい}の関係』を構築^{こうちく}できる存在^{そんざい}が長^{なが}く存続^{そんぞく}するという結論^{けつろん}を支持^ししている——」

「——フッフッ♪ もしコンパース一家^{いつ か}のルーツが本^{ほん}当^{とう}に、ほかの

てんたい
天体だったとしたら、なんだか、おかしいよね？ わたし、し
知らぬ
間に、いせいじん
異星人たちと『Love-Love のかんけい
関係』をきず
築いていたことにな
るんですもの——」

「そうだね」

それから、しばらくの間、あいだ
コンパス一家との思い出話に、はな
花を咲
かせたぼく
僕らは—— ふたた
再び、ふたりして、ぼんやりとすいへいせん
水平線の方を眺
めつづ
続けた。

『Love - Love のかんけい
関係』の

こうちく
構築——

たっせい
これを達成している
そんざい
存在が

なが
長く
そんぞく
存続する

239

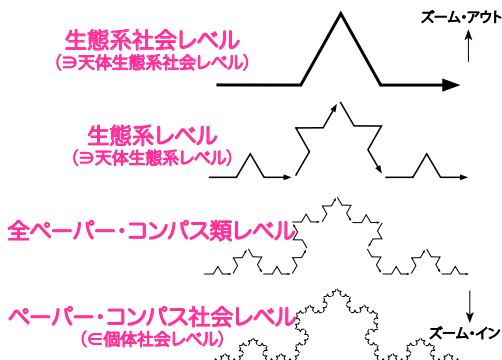
「“もしもコンパース一家が異星人だったら説”のおかげで得られる
結論は、ほかにもあるよ」話を広げる僕。

「え？ なあに？」聞き返す溜音。

「それは、さまざまなペーパー・コンパス社会たちは、お互いに恵
みやフルーツを与え合って『Love-Love の関係』を構築して、健や
かな全ペーパー・コンパス類レベルのライフという、さらに高次レベ
ルのライフに至っているはずだってことさ」

「——え？」

「さまざまなペーパー・コンパス社会たちは、『Love-Love の関係』
を構築して、健やかなペーパー・コンパス社会レベルのライフ、生
態系レベルのライフ、天体生態系社会レベルのライフに至っている
だけでなく、健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフにも
至っているからこそ、あれほどの高度な科学文明に到達しながら長
く存続して、僕らと出会うこともできていたはずだってことさ」



「——」

「だから、少なくとも恒星間の移動を可能にするほど高度な科学文明に到達しながら、われわれに出会えるほど長く存続しているライフが、もし実在しているならば、『Love-Loveの関係』を構築することの重要性を知っているはずで、本来、さまざまな意味で『Love-Loveの関係』を構築しようと実践し続けているはずなんだよ。

例えば、それほど高度な科学文明に到達しているライフが、もし実在して、新たな天体にたどり着いたなら、その暁には——そこには存在する天体生態系との間に『Love-Loveの関係』を構築して、天体生態系社会レベルのライフを育むことこそを、第一目標にするはずなんだよ。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

もし、その第一目標を変更するとすれば、新たな天体に存在する“彼らにとっての異星人”が、彼らに対する、あるいは、天体生態系社会レベルのライフに対する脅威となり続けてしまうような、やむにやまれぬ非常事態に限ると思うよ。

健全な免疫細胞たちがもたらす、発熱を含む本格的な活動が、本来、個体レベルのライフが脅威を受け続けるような、やむにやまれぬ非常事態に限るように——」

「——」 再び、きょんとしている溜音。

「だから、“もしも”の話だよ。“もしも”の——」

「ええ、そうよね。“もしも”の話——。——でも、たとえ“もしも”の話だとしても、学べることが、いっぱいありそうね？」

「ああ、そうだね」

240

その後、しばらくの間、瑠音と僕は水平線の方を眺めた。

今度は、瑠音が最初に口を開いた。「ねえ、そうすると、今この地球上で生きている種のすべては、個体社会レベルだけでなく、少なくとも生態系レベルにおいて『Love-Love の関係』の構築に成功し続けているのね？」

「うーん。一部は正しいけれど、一部は正しくなさそう」と僕。

音楽イン ♪秋 Autumn

「え？ どういうこと？」

「例えば、人類という種と、人類にとって有用な特定のほかの種——植物たちや動物たち、細菌たちが、『Love-Love の関係』の構築に成功し続けているおかげで、これまでお互いに存続しているという意味では、確かに正しいよ。

でも一方で、人類という種が、別のほかの種との間で『Love-Love の関係』の構築に失敗し続けている真っ最中でもありうるとい意味では、正しくないんだよ。

なぜなら、これまで、決して成功だけが続いていたわけではなく、失敗もあったから」

「——え？」

「例えば、オオナマケモノとの関係。例えば、ダイカイギュウとの関係。例えば、オオウミガラスとの関係。例えば、ブルーバックとの関係。例えば、リョコウバトとの関係。…

そして、例えば、ニホン・カワソとの関係——。

これらはどれも、人類が『Love-Love の関係』の構築に失敗し

でしまっていた例に、ほかならなかったのさ」

「——」

「例えば、かつて人類とニホン・カワウソが同時に生存していた時代が確かにあった。でも、その時代の関係は決して『Love-Loveの関係』ではなかったのさ。なぜなら、結果的に一方だけが存続して一方だけが絶滅してしまったのだから。

一方の種だけが存続して、一方の種だけが絶滅してしまったことは、その“同時に存在していた時代”の人類とニホン・カワウソの関係の大部分が『Love-Loveの関係』ではなかったことを証明しているのさ」

「——」

「だから、たとえ現在、この地球上の生態系レベルのライフの中で同時に生存しているからといって、互いに『Love-Loveの関係』の構築に成功し続けているとは限らないんだよ。

例えば、たった今、同時に生きていても、ある種とある種の間に構築されている関係が『Love-Hateの関係』や『Hate-Hateの関係』であることも十分にありうるのさ」

「だから、今同時に生きていれば、『Love-Loveの関係』の構築に成功し続けているはずだという考えは、正しくないのね——」

音楽 ♪秋 Autumn 241 に続く

241

「そうすると、過去に構築されていた『Love-Hateの関係』の例が、

人類^{じんるい}とニホン・カワウソの^{かんけい}関係だったのね？」と瑠音。^{る ね}

「そう。かつて、ニホン・カワウソは、人類^{じんるい}が登場^{とうじよう}するまでは、生態系^{せいいたいけい}レベルのライフ^{いちぶ}一部として、長い^{なが}間^{あいだ}『Love-Love の関係』^{かんけい}の構築^{こうちく}に成功^{せいこう}し続けていた。

でも、人類^{じんるい}のような未熟^{みじゅく}で困^{こま}った種^{しゆ}が新た^{あら}に出現^{しゆつげん}したせいで、『Love-Hate の関係』^{かんけい}を強^しいられ続^{つづ}けた。その結果^{けつ かく}、絶滅^{ぜつめつ}の脅威^{きようい}にさらされ続^{つづ}けただけでなく、本当^{ほんとう}に絶滅^{ぜつめつ}してしまったんだよ」と僕。

「——」

「ここにあるのは、決して、人類^{じんるい}が強^{つよ}くて優秀^{ゆうしゆう}だから」と誇^{ほこ}らしく説明^{せつめい}すべきことじゃない。とんでもないよ。全く逆^{さか}だよ。“人類^{じんるい}が、自身^{じしん}のこと、今^{いま}のこと、目の前^{め まえ}のことしか考^{かんが}えられないほど愚^{おろ}かで——」 かつての自分^{じぶん}自身^{じしん}の愚^{おろ}かさ^さと相^{そう}似^じ！？「知恵^{ちえ}を欠^かいていたから」と説明^{せつめい}するべき、大恥^{おおはじ}、かつ、大損^{おおぞん}だよ。なぜって、人類^{じんるい}が十分に早^{じゅうぶん}いタイミ^{はや}ングで『Love-Love の関係』^{かんけい}の構築^{こうちく}を目標^{め ぎ}する方^{ほう}向^{こう}へと舵^{かじ}を切^きってあげていたならば、ニホン・カワウソは今^{いま}も存続^{そんぞく}できていたはずで、人類^{じんるい}とニホン・カワウソは、お互^{たが}いに豊^{ゆた}かな恵^{めぐ}みやフルーツを得^えられ続^{つづ}けたはずだから——」

「——。 そっか——」 瑠音^{る ね}の声^{こえ}は、しずんでいた。

「——」

「ハア——。 ——もしかしたら、ニホン・カワウソが、せつかく当時^{とう じ}の人類^{じんるい}をずっと愛^{あい}し続^{つづ}けてくれていたのに、当時^{とう じ}の人類^{じんるい}は、ニホン・カワウソをずっと愛^{あい}してあげなかったことになるのかな。

だとしたら、悲^{かな}しいね。とつても——」 彼女^{かのじよ}の目^めが少し潤^{うる}んでいるのがわかった。

「——ああ、確^{たし}かに悲^{かな}しいね」 もらい泣^なきしそうになった。

242

うみ べ 海辺がキラキラし始めている——。

「——ねえ。人類という種が、ほかの種と『Love-Love の関係』を構築することは、ほかの種にとってだけでなく、人類自身にとっても、将来長く存続するために重要なんでしょ？」と瑠音。

「その通りだよ。ほかの種も大事にして『Love-Love の関係』を構築することこそが、本当の意味で人類自身を大事にすることにながっているんだ。

もし人類という種が自身だけを大事にして、恵みやフルーツを受けとることばかりを望んで、ほかの種へ脅威を与え続ける一方ならば—— 長い目で見て、ほかの種の絶滅によって恵みやフルーツを受け取れなくなることを含めて、脅威を受け続けることになり、人類自身が衰退して、将来長く存続できなくなるから」と僕。

「じゃあ、ほかの種と『Love-Love の関係』を構築するために、私たち人類はどうしたらいいの？」

「僕ら人類がすべきことは、ただ1つ—— 周囲に脅威を与えながら繁栄・存続しようと無理にもがくのではなく、周囲に恵みやフルーツを与え続けながら堂々と繁栄・存続することなんだ。

それは、人類という種自身も、ほかの種も、両方を大事にし続けること、両方を愛し続けることなんだ。

人類という種とほかの種たちの総和が生態系だから、つまり、「For 生態系」を目指し続けなければならないのさ」

「For 生態系——」

243

「この For ^{せいたいけい}生態系^{ほうこう}の方向^{すす}に進めば、人類^{じんるい}という種^{しゅ}は、ほかの種^{しゅ}たちと『Love - Love ^{かんけい}の関係^{こうちく}』を構築^{けんくつ}できて、人類^{じんるい}という種^{しゅ}自身^{じしん}も、ほかの種^{しゅ}たちも、つまりは、生態系^{せいたいけい}レベルのライフ^{せんぞく}も存続^{ぞんぞく}できるんだよ」と僕^{ぼく}。

「でも—— そんなことが^{ほんとう}本当にできるの？

もし人類^{じんるい}が、ほかの種^{しゅ}たちから恵^{めぐ}みやフフルーツ^うを受け取りながらこのまま^{はってん}発展^{つづ}し続け^{つづ}れば、それだけでも、ほかの種^{しゅ}たちにとって脅^{きょう}威^いになりうるんでしょ？ だったら、人類^{じんるい}という種^{しゅ}は発展^{はってん}しなければいいってことになるでしょうし——。かといって、人類^{じんるい}が^{はってん}発展^{はってん}しないなんて、たぶん無理^{むり}でしょうし——。

だとしたら、やっぱり——。——」と溜音^{るね}。

「でも、人類^{じんるい}という種^{しゅ}が^{はってん}発展^{はってん}すること自体^{じたい}は、必ずしも悪^{わる}くないよ。って言うか、むしろ^{はってん}発展^{はってん}するべきなんだよ」

「——え？」

「大事^{だいじ}なのは、^{はってん}発展^{さい}する際^{ほうこう}の“方向”なのさ」

「^{ほうこう}方向^{ほうこう}？」

「そう。もしその^{はってん}発展^{さい}する際^{ほうこう}の“方向”が—— 例^{たと}えば、より大^{おお}きく、より多^{おお}く… のような“やみくもな成^{せい}長の^{ちやう}方向”、つまり、“やみくもな『On』^{ほうこう}の方向”であれば、当然^{とうぜん}、改^{かい}善^{ぜん}される必要^{ひつよう}があるよ。第一^{だい}一、^{いち}“やみくもな『On』^{ほうこう}の方向”が、ほかの種^{しゅ}たちにとっても自身^{じしん}にとっても、よいとは限^{かぎ}らないから」

「——。——。——あ、そうよ！ “適^{ほうこう}切^きな『Off』の方向”がよいこともいろいろあるわ。

たとえば、“過剰な採取、過剰な生産、過剰な廃棄量、過剰な化石燃料消費量、過剰な酸素消費量、過剰な二酸化炭素放出量、過剰な人口、過剰なストレス、過剰な食べる量…”

——。それに—— 私の過剰な体重とかも？ アハハッ♪」

“そうなのかい？”というような表情をしてみせた。

“そうなのよ”という表情 & うなずきが返ってきた。

「——もし体重が増えすぎているのなら、体重が減ることが健康のために大事なのは確かだよ」

「——」

「もちろん、逆に、もし体重が減りすぎているのならば、体重が増えることが健康のために大事なのも確かだけれど」

「それはない。それはない。私、ダイエットしなきゃ——」

「——まあ、この体重の話は、生産量、人口、ストレス…の話とも本質的に同じで、いずれにしても、“量的な過剰さ”や“量的な過少さ”があったり予想されたりすれば、それらの改善や予防が、自身にとっても、ほかの種たちにとっても、長い存続のために重要なのは確かだよ。

だから、例えば、“量 For 生態系”という発展が大事になるのさ。

ほかにも、“質 For 生態系”という発展——“発達、成熟 For 生態系”も大事だし、“分布、タイミング For 生態系”という発展——“普及、間に合い For 生態系”も大事だよ。

つまり、“『For』の方向の発展”、発展“For 生態系”ならば、多に達成されていいんだよ」

「発展“For 生態系”——」

「そう。例えば、人類という種のみならず、植物、動物、菌類を含む、ほかの種たちが長く存続すべく、空気、水、土の、量、質、分布、タイミングをほどよく保つ知恵や技術——

例えば、生態系レベルのライフの一部として人類が調和し続けるために、自然エネルギーや燃料や食糧を含む、さまざまなエネルギーの量、質、分布、タイミングを、ほどよく保つ知恵や技術、あるいは、さまざまな人間社会レベルのライフ自身の量、質、分布、タイミングを、ほどよく保つ知恵や工夫—— …

こういった発展“**For 生態系**”ならば、『Love - Love の関係』の構築につながっているから、なおさら歓迎される」

244

キラキラしている海辺に、海鳥たちが集っている——。

「ほかの種と『Love-Love の関係』を構築するために人類がすべきただ1つのこと、“**For 生態系**”路線を育むこと—— その実現のために人類に求められていることは、ほかにもある」と僕。

「それは、なあに？」と溜音。

「全人類を構成している、さまざまな人間社会レベルのライフどうしは、本来、もはや互いに争っている場合じゃないってこと——。つまり、多様な人間社会レベルのライフたちは、恵みやフルーツを与え合いながら健やかな全人類レベルのライフを誕生させていることが、“**For 生態系**”を十分に実現させるための前提として求められ

ているのさ」

「そのために、多様な人間社会レベルのライフたちどうしも『Love
- Love の関係』を構築することが求められているのね？」

「そうだとも。」

この健やかな全人類レベルのライフは、人間社会レベルのライフ
の単なる寄り集まり以上の存在だよ。フラクタル的に相似な健やか
な人間レベルのライフが、細胞社会レベルのライフの単なる寄り集
まり以上の存在であるように——。

この全人類レベルの3ステップと、先ほど話した全ペーパー・
コンパス類レベルの3ステップは、同じレベルだよ。(右図)

だから、健やかな全人類レベルのライフのフルーツフルさは、健
やかな人間レベルのライフのフルーツフルさと相似であるだけでな
く、健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフのフルーツフ
ルさと同等になりうる」

「はあー！」

「この健やかな全人類レベルのライフは、話し言葉や書き言葉など
を使った高度な情報伝達ができる人間社会レベルのライフたちが元
だからこそ、誕生できるんだ。」

かつて、DNA や RNA などを使った高度な情報伝達ができる生
体高分子社会レベルのライフたちが元だったからこそ、健やかな
(真核)細胞レベルのライフが誕生できたように——。

あるいは、神経伝達物質やホルモンなどを使った高度な情報伝達
ができる細胞社会レベルのライフたちが元だったからこそ、健やか
な個体レベルのライフが誕生できたように——」

生態系レベル

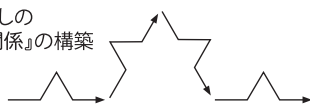
(by全人類レベルのライフとしてのヒトという種と多様な他種どうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築)



全人類レベル

(by多様な人間社会レベルのライフどうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築)

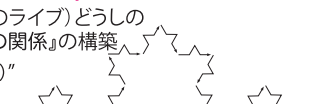
“言葉(音声言語、文字…)”
を利用する高度な情報伝達が前提)



個体社会レベル(≒人間社会レベル)

(by多様な個体レベルのライフ(≒人間レベルのライフ)どうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築)

byときに“言葉(音声言語、文字…)”
を利用する高度な情報伝達)

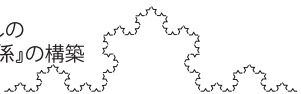


※個体社会レベルのライフ(≒人間社会レベルのライフ)
の単なる集合としての種はこのレベルどまり

個体レベル(≒人間レベル)

(by多様な細胞社会レベルのライフどうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築)

“神経伝達物質やホルモン…”
を利用する高度な情報伝達が前提)



細胞社会レベル

(by多様な細胞レベルのライフどうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築)

by“神経伝達物質やホルモン…”
を利用する高度な情報伝達)



(真核)細胞レベル

(by多様な生体高分子社会レベルのライフどうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築
“RNA、DNA”を利用する高度な情報伝達が前提)

…

生体高分子社会レベル

(by多様な生体高分子レベルのライフどうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築
by“RNA、DNA”を利用する高度な情報伝達)

…

245

「それじゃあ、話し言葉や書き言葉などを使った高度な情報伝達ができない別の種たちにとって、健やかな全人類レベルのライフと同様なライフの誕生させることは難しいのね？」と溜音。

「そう。たとえ、アリやハチにとっても、チンパンジーやボノボにとっても、イルカやクジラにとっても…難しいのさ。」

しかも、話し言葉や書き言葉などを使った高度な情報伝達ができる人間社会レベルのライフたちにとってさえも、健やかな全人類レベルのライフの誕生は可能性の話にすぎず、まだ実現していないことだよ。ただ、それでも——健やかな全人類レベルと同様なライフの誕生を実現している存在が、すでに、この宇宙にいるはずだよ」

「それが、健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフね？」

「そうさ。ペーパー・コンパス社会レベルのライフたちは、話し言葉や書き言葉などを使った高度な情報伝達によって、健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフの誕生をすでに実現しているはずなのさ。そのおかげで、あれほど高度な科学技術を健全に利用できているはずだから」

「——アハッ♪ さすがよね」

「そうだね。だから、健やかな全人類レベルのライフの誕生は、決して夢物語ではなく、十分に実現可能なんだよ。」

いや、単に実現可能だけでなく、実現するべきなんだ——」

「この健やかな全人類レベルのライフの誕生が前提となっていて、“For 生態系”を十分に実現できるからね？」

「その通りさ」

246

「——じゃあ、人類という種は、“For 生態系”を十分に実現するために、健全な全人類レベルのライフとして、滅私奉公の精神で奉仕し続けられればいいってこと？」と瑠音。

「——ある意味、正しいけれど、ある意味、間違えているよ」と僕。

「え？ どういうこと？」

「うん。正しいと言うのは——例えば、実際に植林を実施したり、実際に環境汚染を浄化したり、実際に環境への負担がより少ない産業やエネルギー源を育てたり、実際にリユースやりサイクルをしたり…を含めて、生態系レベルのライフのためになる活動を実現するために、健全な全人類レベルのライフとして、時間やパワーの投資が不可欠になるからだよ。

別の見方をすれば——健全な全人類レベルのライフは、生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の存在、生態系レベルのライフの重要部分として活躍できるかもしれないってことなんだけどね」
「生態系レベルのライフの重要部分——」

「そう。生態系レベルのライフの内外の全体像を常に把握して、危機を察知して回避したり、キズを保護して早い回復を促したり、さまざまなコンディションを調べたり…生態系レベルのライフをしっかり守って存続させるべく、より迅速に、より強力に、よりしなやかに対応できる立場のことさ。それこそ、人体の中の頭脳、脳神経系のように——。

だから人体における頭脳、脳神経系は、厳密には、さまざまな神経細胞社会レベルのライフ支え合って生まれている、健全な頭脳

神経系レベルのライフと呼びうる、細胞社会レベルより高次レベルの存在、人間レベルと同じレベルの存在として、人間レベルのライフの『アタマ』の方向の重要部分を担っていたことになる——」

「それと相似な存在が、生態系における健やかな全人類レベルのライフ——」

「そう。生態系レベルのライフの頭脳、脳神経系としての、健やかな全人類レベルのライフの具体的な対応には、例えば、気候変動の兆候や原因をモニターして早め早めに対処することで急激な気候変動を予防したり改善したりするとか、宇宙からの隕石の衝突の可能性を早めに察知して上手に対処するとか、公害や砂漠化が進んでいる地域をモニターして知恵や技術を出し合いながら健全な自然を取り戻すとか…によって生態系レベルのライフを守ることも含まれるよ。——だから、生態系レベルのライフの重要部分としての大きな貢献にともなって実際に時間やパワーを消費するという意味では、“滅私奉公の精神での奉仕”は正しいのさ」

「そうね」

「そして、間違えているというのは、何より健やかな全人類レベルのライフ自身が生態系レベルのライフの一部そのものだからなんだ。それこそ、健やかな頭脳神経系レベルのライフが人体の一部そのものであるように——」

「——」

「“一部そのもの”であることが何を意味しているか——」

「——何を意味しているの？」

「それは、生態系レベルのライフのためであることが同時に健やか

ぜんじんるい
な全人類レベルのライフ自身のためでもあることを意味しているの
さ。それこそ、人体のためであることが同時に健康やかな頭脳神経系
レベルのライフ自身のためでもあるように――。

つまり、生態系レベルのライフが健康やかに生きるためにも健康やか
な全人類レベルのライフ自身が生きるためにも――それが“For
生態系”が本来意味する内容なんだよ。

だから、自分自身のためでもあるという意味では、“For 生態系”
路線が“滅私奉公”であるというのは正しくないのさ」

「――ええ、そうね♪」

「さらに、“For 生態系”には、目先の将来のためにも長い将来の
ためにもという意味も含めることができる。このあたりのことは、
せいめいなんじゅうおくねん れきし おし
生命何十億年もの歴史も教えてくれているんだよ」

「――え？」

247

いま なんじゅうおくねん まえ ちきゅうじょう せいめい たんじょう
「今から何十億年も前の地球上に、生命が誕生した。

音楽イン ♪ Birthtime

さいしよ たんじょう たよう すこ せいたいこうぶん し
最初に誕生した多様な健康やかな生体高分子レベルのライフは――
じぶん じしん せいたいこうぶん ししゃかい
自分自身のためにも生体高分子社会レベルのライフのためにもな
るように、なおかつ、目先の将来のためにも長い将来のためにもな
るように成熟していたおかげで、『Love - Love の関係』を構築で
きて、健康やかな生体高分子社会レベルのライフの一部として、これ
なが そんぞく
まで長く存続できた。

つぎ たんじょう すこ たよう さいたいこう ぶ しやかい
次に誕生した健やかな多様な生体高分子社会レベルのライフは――

じぶん じしん さいぼう
自分自身のためにも細胞レベルのライフのためにもなるように、
なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来のためにもなるように
せいじゅく
成熟していたおかげで、『Love - Love の関係』を構築できて、健や
かな さいぼう
かな細胞レベルのライフの一部として、これまでなが さんぞく
長く存続できた。

つぎ たんじょう すこ たよう さいぼう
次に誕生した健やかな多様な細胞レベルのライフは――

じぶん じしん さいぼうしやかい
自分自身のためにも細胞社会レベルのライフのためにもなるよう
に、なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来のためにもなるように
せいじゅく
成熟していたおかげで、『Love - Love の関係』を構築できて、健や
かな さいぼうしやかい
かな細胞社会レベルのライフの一部として、これまでなが さんぞく
長く存続できた。

とく すこ しんけいさいぼうしやかい
特に健やかな神経細胞社会レベルのライフは――

じぶん じしん ずのうしんけいけい
自分自身のためにも頭脳神経系レベルのライフのためにもなるよ
うに、なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来のためにもなるよ
うにせいじゅく
成熟していたおかげで、『Love - Love の関係』を構築できて、
すこ ずのうしんけいけい いちぶ なが さん
健やかな頭脳神経系レベルのライフの一部として、これまで長く存
続できた。

つぎ たんじょう すこ たよう さいぼうしやかい すこ
次に誕生した健やかな多様な細胞社会レベルのライフ、健やかな
ずのうしんけいけい
頭脳神経系レベルのライフは――

じぶん じしん こたい にんげん
自分自身のためにも個体レベルのライフ (≒人間レベルのライフ)
のためにもなるように、なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来
のためにもなるようにせいじゅく
成熟していたおかげで、『Love - Love の関
係』を構築できて、すこ こたい にんげん
健やかな個体レベルのライフ (≒人間レベルのラ
イフ) いちぶ なが さんぞく
イフ)の一部として、これまで長く存続できた。

つぎ たんじょう すこ た よう こ たい にんげん
次に誕生した健やかな多様な個体レベルのライフ(≒人間レベルの
ライフ)は――

じぶん じしん こ たいしやかい にんげんしやかい
自分自身のためにも個体社会レベルのライフ(≒人間社会レベルの
ライフ)のためにもなるように、なおかつ、め ぎき しやうらい
目先の将来のためにもなが
なが しやうらい
長い将来のためにもなるようにせいじよく
成熟していたおかげで、『Love -
Love の関係』を構築できて、健やかな個体社会レベルのライフ(≒
にんげんしやかい
人間社会レベルのライフ)の一部として、これまでなが そんぞく
長く存続できた。

とく すこ にんげんしやかい
特に健やかな人間社会レベルのライフは――
じぶん じしん ぜんじんるい
自分自身のためにも全人類レベルのライフのためにもなるように、
め ぎき しやうらい
なおかつ、目先の将来のためにもなが しやうらい
なが しやうらい
長い将来のためにもなるようにせい
じよく
熟していればこそ、そのおかげで『Love - Love の関係』を構築で
きて、すこ ぜんじんるい
すこ ぜんじんるい
健やかな全人類レベルのライフの一部として、これからなが
そんぞく
長く存続できる。

たんじょう すこ た よう こ たいしやかい にん
これまで誕生した健やかな多様な個体社会レベルのライフ(≒人
げんしやかい
間社会レベルのライフ)や、これからたんじょう すこ
ぜんじん
類レベルのライフのライフは――

じぶん じしん せいたいけい
自分自身のためにも生態系レベルのライフのためにもなるように、
め ぎき しやうらい
なおかつ、目先の将来のためにもなが しやうらい
なが しやうらい
長い将来のためにもなるようにせい
じよく つづ
熟し続けていればこそ、そのおかげで」

「『Love - Love の関係』を構築できて、せいたいけい
生態系レベルのライフのいち
部として、これからなが そんぞく
なが そんぞく
長く存続できるのね！」 彼女のめ ぎき
め ぎき
彼女が明るく言った。

「そうさ。だから、このようにくうかんでき じ かんてき ひろく
くうかんでき じ かんてき ひろく
空間的にも時間的にも広く『For』
になるようにせいじよく
せいじよく
成熟しているおかげで、すなわち――

“For ^{せいたいこうぶんし}生体高分子”

“For ^{せいたいこうぶんししゃかい}生体高分子社会”

“For ^{さいぼう}細胞”

“For ^{さいぼうししゃかい}細胞社会”

“For ^{ずのうしんけいけい}頭脳神経系”

“For ^{こたい}個体”

“For ^{にんげん}人間”

“For ^{こたいししゃかい}個体社会”

“For ^{にんげんししゃかい}人間社会”

“For ^{ぜんじんるい}全人類”

“For ^{せいたいけい}生態系”

“For ^{みじかしょうらい}短い将来のライフ”

“For ^{ながしょうらい}長い将来のライフ”

...

For “『In』 & 『Out』”

のような、成熟 For Life のおかげで——『Love - Love ^{かんけい}の関係』
を構築しながら、これまで、みんな ^{すこ}健やかに ^{なが}長く ^{そんぞく}存続できていたし、
これから、みんな ^{すこ}健やかに ^{なが}長く ^{そんぞく}存続できるんだ」

「For Life —— それは、何十億年 ^{なんじゅうおくねん}もの ^{れきし}ライフの ^{おし}歴史が教えてくれ
る、とびっきりの ^{ちえ}知恵なのね！」

「そうさ。For Life の ^{ちえ}知恵、For “『In』 & 『Out』” を ^{じっせん}実践している
ライフの ^{てんけいれい}典型例の 1 つが ^{ていきよう}フルーツを ^{しょくぶつ}提供する ^{かじつ}植物だよ。 ^{なか}果実の中の
^{たね}種が『For』『In』、果実の中の ^{かじつ}果皮が ^{なか}『For』『Out』だから」

「へえー♪ フルーツは、For Life の ^{ちえ}知恵の ^{じっせん}実践の ^{しょうちよう}象徴なのね♪」

For Life ——

それは、^{なんじゅうおくねん}何十億年もの

ライフの^{れきし}歴史が^{おし}教えてくれる

とびっきりの^{ちえ}知恵

248

うみ べ かがや ます
海辺のキラキラが輝きを増している——。

「For Life —— すてきね。

この For Life のおかげで、『Love - Love の関係』を構築できる
んですもの」と溜音。

「そうだね。地球上の何十億年の歴史を持つライフ自身が示してい
る方向だから、なおさら——」と僕。

「そうね。もしかしたら異星人だったかもしれないコンパース一家
が示している方向でもあるから、さらになおさら—— アハッ♪」

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky

「アハハッ。そうだね。

まあ、それは健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフの
出身が地球であってもなくても、いずれにしても同じだよ。

それでも、この For Life の知恵は、人類が、将来、健やかな全
人類レベルのライフを誕生させ、天体生態系社会レベルの一員とな
りながら宇宙に進出する際にも必須になるほど普遍的で大切である
のは確かだよ。その意味で、For Life の知恵は、未来が教えてくれ
る知恵でもあるのかもしれない——」

「すてき♪」

「For Life の知恵——『In』と『Out』の両方のためにという知恵
の実践例は、現在の人間社会においても、いろいろ認められるよ。

例えば、交通ルールを守ることが、自分自身と相手の両方を守る
ために役立つとか—— 手洗いやマスクの着用を含む衛生管理が、
自分自身と周囲の両方の感染予防につながるとか—— 乱獲しない

ことを含めて食糧資源を大事に守ることが、^{じこく} 自国と^{たこく} 他国の^{りやうほう} 両方、あるいは、^{じんるい} 人類と^{たしゆ} 他種の^{りやうほう} 両方、あるいは、^{めさき} 目先と^{とお} 遠い^{しやうらい} 将来の^{りやうほう} 両方のためになるとか—— …

つまり、^{すこ} 健やかな^{しゃかい} 社会においてルールや^{やくそく} 約束や^{まも} エチケットを守ることは、たいてい、『In』と『Out』の^{りやうほう} 両方のためになっているよ」
「^{たし} 確かに、そうよね♪」

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

249

しばらくの間、^{あいだ} 水平線^{すいへいせん} の方^{ほう} の^{なが} ぼんやり^{つづ} 眺め^る 続けていた^ね 瑠音が口を開いた。「そうすると—— わたしたちは、みんながみんな、^き 決まりきった^{おな} 同じことをしなければならなくてことになるのかなあ。

だとしたら——」

「——だとしたら？」と^{ぼく} 僕。

「^{きゆうくつ} 窮屈^{あじ} というか、^{あじ} 味気ない^け というか、^{あき} つまらない^{あき} というか…」 明らかに^{かのじよ} 彼女は、しずんでいた。

「もし、みんながみんな、^{ほんとう} 本当に、^き 決まりきった^{おな} 同じことをしなければならなければ、^{たし} 確かに、^{きゆうくつ} 窮屈で、つまらないよ。

でも、ここにあるのは、ちょっと^{ちが} 違うんだよ」

「^{ちが} どんなふうに違うの？」

「まず、^き 基本的^{ほんてき} には、それぞれが、^{しんぞこ} 心底^{じぶん} やりたくて^{じぶん} 自分自身^{よろこ} を喜ばせることを^{じゆう} 自由に^{えら} 選んで、^す 好きなようにやっていいんだよ。

しかし、その自由^{じゆう}に選^{えら}んだことは、単^{たん}に自分^{じぶん}自身^{じしん}を喜^{よろ}ばせるだけ
 であれば、タイミング^{じようきよう}や状況^{むはいりよ}、無配慮^{むしりよ}や無思慮^{しいうい}… によって周囲^{しうい}の
 みんなを悲^{かな}しませたり困^{こま}らせたりすることでありうる。その場合^{ばあい}、
 もし、そのまま続^{つづ}けたなら、最終^{さいしゆう}的に、自分^{じぶん}自身^{じしん}が、非難^{ひなん}されたり、
 罰^{ばつ}せられたり、傷^{きず}ついたり、病^やんだり… 結局^{けつぎよく}、自分^{じぶん}自身^{じしん}も、つら
 くなる。

でも、もし、その自由^{じゆう}に選^{えら}んだことを、タイミング^{じようきよう}や状況^{みほか}を見計^み
 らったり配慮^{はいりよ}や思慮^{しりよ}を加^{くわ}えたり… によって、自分^{じぶん}自身^{じしん}だけでなく
 周囲^{しうい}のみんなも喜^{よろこ}ぶことへと洗練^{せんれん}させたり成熟^{せいじよく}させたりできれば——
 最終^{さいしゆう}的に、自分^{じぶん}自身^{じしん}も周囲^{しうい}のみんなも安心^{あんしん}だったり、健^{すこ}やかだっ
 たり、満足^{まんぞく}だったり、幸^{しあわ}せだったり… を含^{ふく}めて、結局^{けつぎよく}、自分^{じぶん}自身^{じしん}も
 周囲^{しうい}のみんなも、うれしいことになる。

つまり、For Life の知恵^{ちえ}——『In』と『Out』^{りようほう}の両方^{りようほう}のためにと
 いう知恵^{ちえ}の実践例^{じっせんれい}として、個人^{こじん}の自己^{じこ}実現^{じこじつげん}も挙^あげられるのさ。この
 場合^{ばあい}の自己^{じこ}実現^{じこじつげん}とは、フルーツのように For“『In』 & 『Out』”の
 存在^{そんざい}になること、いわば自己^{じこ}フルーツ化^かだよ。健全^{けんぜん}な自己^{じこ}実現^{じこじつげん}は、
 のびやかな自己^{じこ}フルーツ化^かでもあるんだ。

だから、ここにあるのは、“みんな決^きまりきった同^{おな}じことをしな
 ければならない”といった窮屈^{きうくつ}でつまらない制限^{せいげん}というより——
 このよう^{せいじよく}な成熟^{せいじよく} For“『In』 & 『Out』”、成熟^{せいじよく} For Life を実現^{じつげん}でき
 れば、お互^{たが}いに、喜^{よろこ}びを保^{たも}てたり、喜^{よろこ}びを増^ふやせたりできるよって
 いう、のびやかな、おいしい知恵^{ちえ}なんだよ。フルーツのように」
 「よかった♪ For Life の知恵^{ちえ}は、のびのびしていて、おいしい
 のね♪ フルーツのように♪」

「そう。このように、成熟 For Life という条件の中で、多様な自己
 実現、多様な“ライフのあり方”が保証されていることは、生態系レ
 ベルのライフを構成する多様な種が教えてくれることでもあるよ」
 「え？」

250

「フルーツを提供する多様な植物種を含めて、生態系レベルのライ
 フを構成する種がこんなに多様性にあふれていることは、成熟 For
 Life の実現と、“ライフのあり方”の限らない多様性の実現、限り
 ない多様な自己実現が両立することを保証しているのさ。
 成熟 For Life を実現している植物種が、こんなに多様性にあふれ
 ながら生態系レベルのライフを構成しているように、成熟 For Life
 を実現している人生も、健全な自己実現、自己フルーツ化を果たし
 ている人生も、多様性にあふれながら人間社会レベルのライフを構
 成できるのさ。フラクタル的に相似だから——」と僕。

「——よかったあ♪」と溜音。「そうすると、成熟 For Life のおか
 げの『Love - Love の関係』の構築と、人生が限りなく多様である
 ことも、両立できるのね？」

「その通り。成熟 For Life によって『Love - Love の関係』を構築
 しながら、人生、人間レベルのライフは、いくらでも多様性にあふ
 れられる。種、個体社会レベルのライフのように——。

しかも、このように、いくらでも多様性にあふれられるのは、生
 態系レベルのライフ、人間社会レベルのライフ、細胞社会レベルの

ライフ…そして、未来の健やかな全人類レベルのライフも同じさ」
 「相似だからね？」

「そう。その通りだよ！」

251

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

「ねえ、高校時代の、7つのワクワク枠が、いろんな“ライフのあり方”を教えてくれるだろうって話、覚えている？」と瑠音。

「ああ、覚えているよ」と僕。

「あの日、私たちが挙げた“ライフのあり方”が結局すべて『For』ライフの例になっていることに気づいたけれど——あの日の『For』ライフと今日の“成熟 For Life”の中の For Life は、発音が同じだけれど意味は違うよね。

——これらの2つのフォー・ライフは、全く無関係かしら？」

「いや、大いに関係あると思うよ。

なぜって、1つは、僕らが高校時代に挙げた、いろんな『For』ライフも、成熟 For Life を実現できてはじめて本物になるから。

もし、成熟 For Life を実現できないまま、“生態系レベルのライフ、人間社会レベルのライフ、細胞社会レベルのライフ…”を害し続けていれば、長い目で見て、喜び、楽しみ、快適さ…にあふれた『For』ライフを維持できなくなってしまうのだから当然だよな」

「あ、そっか——。それもそうよね」

「それから、もう1つの理由は、『For』ライフが、成熟 For Life

じつげん
の実現につながりやすいから。

たとえば、“今、心地よくてハッピー”であれば、それだけストレスも少なくリラックスできているってことで、“頭と体の健康”や“心の健康”につながりやすい。それは、“人間レベルのライフのため”になりやすいのはもとより、“細胞社会レベルのライフのため”にもなりやすい。

それに“今、心地よくてハッピー”なら、それだけ“自分自身も、ほかの誰かも生きるため”に活躍しやすい。それは結局、“人間社会レベルのライフのため”につながりやすいってことでもある

「アハッ♪ そうね。——すると、同じ理由で、『For』ライフは、“生態系レベルのライフのため、未来の健やかな全人類レベルのライフのため、長い将来のため”にもつながりやすくなるのね？」

「そうさ。まず自分自身が『For』ライフを営めれば、心身がイキイキ、ウキウキ、ワクワクし、さまざまなライフ——人間レベルのライフ、人間社会レベルのライフ、生態系レベルのライフ…そして、未来の健やかな全人類レベルのライフのために活躍しやすくなる。つまり、このように『For』ライフが成熟 For Life の実現につながりやすいことも『For』ライフと For Life を大いに関連させている」

「ええ、そうね♪」

音楽フェード・アウト ♪心地よき日々 Comfortable Days

252

あい か おな く かえ なみ
相変わらず、同じペースで繰り返される波——。

ザブーン、ザザザシュー…

「ねえ、そうすると、逆に『Against』ライフに陥ってしまったら、やっぱり、成熟 For Life の実現も危うくなるのかしら？」と瑠音。

「うーん——」・・・「それは、結局—— そのあと、どんな方向を目指すか次第、つまり、その後の選択次第じゃないかなあ」と僕。

「選択？」

音楽イン ♪ Reconstruction

「そう。そりゃあ、『For』ライフに比べれば、『Against』ライフの方が、リスクが大きいと思うよ。

だって、例えば、悲しみやつらさ…をためこんで長くくすぶらせ続けてしまえば、ストレスが蓄積して健康を害してしまったり、“何か”や“誰か”を傷つけることにつながってしまったり…未熟な Against Life 路線をとりやすいのは確かだろうから。

でも、でもだよ——。たとえ、悲しみやつらさ…に遭遇したとしても、上手に対処して、心底さっぱりした上で、次の目標、楽しみ、ワクワク…を育むように方向転換する“ライフのあり方”を選択するならば、未熟な Against Life 路線を外れ、成熟 For Life を実現できるんだよ。

この“ライフのあり方”の選択は、まさに、“人間レベルの3ステップと『アタマ』の方向”の所産である“～しよう”の意志や“～するのがよい”の知恵が関わっていることだよ。

この知恵には、悲しみやつらさ…からくる、モンモン、ウツウツ、クヨクヨ…を含むストレス反応自体が細胞社会レベルの3ステップの所産にすぎず、呼吸法などでコントロールできるという認識も含まれているはずだよ」

「——ええ、そうね♪」

音楽 ♪ Reconstruction 253 に続く

253

「それに、成熟^{せいじうく} For Life^{じつげん}を実現するために、やむなく甘受^{かんじゆ}すべき
“一時的^{いちじてき}な『Against』ライフ”も、きっとあるはずだよ。

たと
例えば——

おじいちゃんが本気^{ほんき}で怒^{おこ}りながら“人生^{じんせい}はこれからなんじゃ”と
励^{はげ}ましてくれたときの心^{こころ}の痛^{いた}み

休養^{きゅうよう}の大切^{たいせつ}さを教^{おし}えてくれた、スランプのときの苦^{くる}しさ

ペース配分^{はいぶん}の大切^{たいせつ}さを教^{おし}えてくれた、急^{きゅう}な坂^{さか}を上^{のぼ}る際^{さい}のしんどさ

コンパルンクルに“思^{おも}いやりの心^{こころ}”や“楽^{たの}しみにする心^{こころ}”の大切^{たいせつ}さ
を教^{おし}えてあげることとなった、試験期間^{しけんきかんちゆう}中の君^{きみ}に会^あうのを我慢^{がまん}させ
るつらさ… とか？」と僕^{ぼく}。

「フフッ♪ そうよね。

こういった一時的^{いちじてき}な『Against』ライフたちは、どれも成熟^{せいじうく} For
Life^{じつげん}を実現するまでの起点^{きてん}や転機^{てんき}、し練^{しれん}の意味^{いみ}を持^もっているのね。

ほかにも——

子供^{こども}が歩^{ある}き方^{かた}を身^みにつける頃^{ころ}の、転倒^{てんとう}の際^{さい}の痛^{いた}み

健康^{けんこう}のために乗^のり越^こえる、採血^{さいけつ}や点^{てん}滴^{てき}などの際^{さい}の針^{はり}の痛^{いた}み

元^{げん}気^きな赤^{あか}ちゃんを生^うむために乗^のり越^こえるつわりのつらさ…

も同じ^{おな}じで」と瑠音^{るね}。

「そうさ。だから—— 痛^{いた}み、つらさ、しんどさ… は、なくてす

むなら、それに越したことはないけれど、これらを甘受^{かんじゅ}する一時的^{いちじてき}な『Against』ライフは、ときに、成熟^{せいじゅく} For Life を実現^{じつげん}するまでの貴重な^{きちやう}プロセスになりうるのさ」

「プロセス——」

「そう。それは確^{たし}かに“プロセスなりうる”ということにすぎず、ときに、こういった一時的^{いちじてき}な『Against』ライフが、心の傷^{こころ きず}をもたらし続けたり、さらなる悲劇^{ひげき}の原因^{げんいん}になったりすることもありうる。

そうなるかならないかの分岐点^{ぶんきてん}は何かといえ——

“ある『Against』ライフを経験^{けいけん}した際に、成熟^{せいじゅく} For Life 志向^{しこう}を貫^{つらぬ}けるかどうか”なんだよ」

「——ええ、そうね。 ——。 ——あ、そうだ！

そういう意味^{い み}でも、可能^{かのう}な限り、イヤな連鎖^{れんさ}を断^たつこと——

“『Against』の連鎖^{れんさ}を断^たち切^きること”は大切^{たいせつ}になるよね？」

「え？——」・・・「——もしかして、あのこと？」

「そう。

——ちょっぴり見直^{みなお}したでしょ？ アハハッ♪」

すぐ見直^{みなお}した。

可能^{かのう}な限り、『Against』を連鎖^{れんさ}させないこと——

彼女^{かのじよ}が、かつて、クラスメートに向けて取^むっていた、あの態度^{たいど}が、これほど、すてきだったとは——。

音楽フェード・アウト ♪ Reconstruction

254

さらに輝きを増している海辺のキラキラ——。

しばらくすると、瑠音が口を開いた。

「確かに、“『Against』を連鎖させないこと”は、単なる理想にすぎないかもしれないし—— ときに、心の痛みを抱え続けざるをえなかったり、ときに、はっきりとした主張のせいで議論が終わらなくなったり… もありうるよ。『Against』ライフを、一時的なプロセスに、なかなかできないせいで——。

音楽イン ♪ Love

でも、もし、みんなが最初から、少しずつでも、そういう“優しさ”とか“ゆるす気持ち”とかを持ち寄って、『Against』を連鎖させないように、プチ『Against』のうちにイヤな連鎖を断ち切る努力をしていたら—— きっと—— 何ていうか、——いいよね？」

「そうだね。

『Against』を連鎖させないためには、はじめから、逆の『For』を連鎖させ続けていること、“優しさ”や“ゆるす気持ち”などの『For』を与え続けていることが、一番効果的なんだろうね」

・・・ 「——あ！」僕は、思わず声を上げた。

「え？ どうしたの？」

「ゆるすって、“forgive”じゃん。この“forgive”には、“与えるために”の意味だけでなく、“『For』を与える”の意味もありそうだよ」

「アハッ♪ おもしろーい♪ 確かに、そうらしいわよね」

「だろだろ？」

音楽 ♪ Love 255 へ続く

255

「ときには、あっさりゆるす方が、お互い早くすっきりする場合がありますわよね？ もちろん、ときには、安易にゆるしていけない場合もあるけど——」と溜音。

「ああ、そうだね」と僕。

「——あ、そう言えば、『ゆるすのは自分のためでもある』という言葉の前に本で読んだわ。そうすると、『For』を相手だけでなく自分自身にも与えることが“ゆるす forgive”だったのね。

——。——あ！」

「あ！」僕は、ほとんど同時に、“あ！”を発した。

「忘れるが“forget”だと気づいたんでしょ？」と彼女。

「そうだよ。“forget”には、きっと“『For』を得る”って意味もあるよ。“得るために”だけでなく——。だから、相手や自分が『For』をゲットすることが、“忘れる forget”だったんだよ」

「そうね。ときには、あっさり忘れる方が、お互い早くすっきりする場合がありますわ。もちろん、ときには、決して忘れていけない場合もあるけど——。確かに『忘れるのは相手のためでもある』って言葉も、どこかで聞いたことがある——」

「そうすると—— “ゆるす forgive”と“忘れる forget”は、両方とも、結局、自分や相手に『For』を提供することにつながっているという意味で、同じじゃん」

「おもしろい♪ それに、そもそも“忘れる”には“ゆるす”の意味があるようだよ。——そうよ。“忘れる”と“ゆるす”、“forget”と“forgive”は、本来切っても切れない関係にあるのよ。だから、“忘

れながら、ゆるす”、“ゆるしながら^{わす}忘れる”が本来^{ほんらい}ふつうなのよ」

「なるほど」

音楽 ♪ Love 256 へ続く

256

「もしかしたら、“^{わす}忘れながら、ゆるす”、“forget しながら forgive する”は—— “『For』を^え得ながら『For』を^{あた}与える”という、より
いっぽんてき ち え れい ぼく
一般的な知恵の1例なのかもね？」と僕。

「——ええ、そうよ！

^{たと}
例えば——

^{じ ぶん よろこ}
自分が喜びながら誰かを喜ばせる。

^{じ ぶん たの}
自分が楽しみながら誰かを楽しませる。

^{おも で つく}
すてきな思い出を作りながら、すてきな思い出を作らせてあげる。

^{じつげん}
いつか実現したい夢や目標^{ゆめ もくりょう}を見つけながら、いつか^{じつげん}実現したい夢
^{もくりょう み}
や目標を見つけさせてあげる。

...

^{おな}
どれも同じなんだわ」と溜音。^{る ね}

「そうだね。どれも、“^{わす}忘れながら、ゆるす”、“^{わす}忘れながら^{わす}忘れさせてあげる”と本質的に同じで、『For』を^え得ながら『For』を^{あた}与えて
^{ほんしつてき おな}
いることになっているんだね」

「そうよ。

それに、このような自分^{じ ぶん}自身^{じ しん}のためになりながら^{あいて}相手のためになっ

ているという一般的な知恵は、まさに、For Life 志向^{しこう}にも適^{かな}って
いるわ♪」

音楽フェード・アウト ♪ Love

「そうだね。自分^{じぶん}のためにも、相手^{あいて}のためにも、つまり、For “『In』
& 『Out』” 志向^{しこう}という意味^{いみ}の For Life 志向^{しこう}——」

「そうよ」

「つまり——

例えば、忘^{わす}れながら忘^{わす}れさせたり、楽^{たの}しみながら楽^{たの}ませせたり、
喜^{よろこ}びながら喜^{よろこ}ばせたり… によって、『For』を得^えながら『For』を
与^{あた}えること、自分^{じぶん}と相手^{あいて}の両方^{りやうほう}のためになることが可能^{かのう}であり——
そのために『For』こそを与^{あた}え続^{つづ}ければ、『Against』の連鎖^{れんさ}を断^たち
切^きりながら For Life 志向^{しこう}を貫^{つらぬ}くことができる—— そのような深^{ふか}
い考え^{かんが}が、かつて君^{きみ}がクラスメートに向^むけて取^とっていた、あの態^{たい}度^ど
の奥^{おく}にあっただね」

「ええ、そうなのよ。

——って、そんなわけないでしょ？ フフッ♪」 はにかむ彼女^{かのじよ}。

257

ザブーン、ザザザザシュー …

海^{うみ}辺^べのキラキラがさらにさらに増^ましている——。

「そうすると——

自分^{じぶん}自身^{じしん}の『For』ライフのおかげで成熟^{せいじきく} For Life が実現^{じつげん}しやす

くなる^{いつぽう}一方で、たとえ『Against』ライフに^{おちい}陥ってしまったとしても、上手^{じょうず}に対応^{たいおう}することで、For Life 志向^{しこう}を貫^{つらぬ}けるのね？」と^る溜音。

「そうさ。しかも、たとえ『For』ライフであっても、あくまで For Life 志向^{しこう}を貫^{つらぬ}き続けることが重要^{じゅうよう}になるよ。なぜって、『For』ライフが成熟^{せいじゅく} For Life を実現^{じつげん}しやすいのも、あくまで単^{たん}に“実現^{じつげん}しやすい”ってだけの話^{はなし}で、たとえ『For』ライフであっても、下手^{へた}すりゃ、Against Life 路線^{ろせん}に至^{いた}ってしまうのだから——」と僕^{ぼく}。

「——ええ。言^いわれてみれば、確^{たし}かにそうよね。

今^{いま}の自分^{じぶん}の楽^{たの}しみが、将来^{しょうらい}の自分^{じぶん}を困^{こま}らせてしまったり、目^めの前^{まえ}の喜^{よろこ}びが周^{しゅう}囲^いの迷^{めい}惑^{わく}になっ^てしまったり… もありうるもんね」

「そう。その通^{とお}り。

それで、一方^{いつぽう}、次^{つぎ}のようなこと^いも言^いえる。

“自分^{じぶん}自身^{じしん}の For Life 志向^{しこう}が高^{たか}まれば、そのおかげで周^{まわ}りも For Life 志向^{しこう}を高^{たか}めやすくな^{つて}、周^{まわ}りの For Life 志向^{しこう}が高^{たか}まれば、そのおかげで自分^{じぶん}自身^{じしん}も For Life 志向^{しこう}を高^{たか}めやすくなる——”
そんなことも」

「そうね。やっぱり、『For』の連鎖^{れんさ}というか、『For』のリレーと
いうか——。——」

258

「——アハッ♪ 最初^{さいしよ}は周^{まわ}りから多^{おほ}くの恵^{めぐ}みを受け取^うっていた赤^{あか}
ちゃん^{せいちやう}が、成長^{せいちょう}すること^{おお}で多^{おほ}くの^{ひと}に恵^{めぐ}みを与^{あた}えられるようにな

ることを思い出せば、

誰かのおかげで生きて

→その誰かや自分自身を含むみんなのために生きて

誰かから恵みやフルーツを受けて

→その誰かや自分自身を含むみんなに恵みやフルーツを与えて

誰かから恩や愛を受けて

→その誰かや自分自身を含むみんなに恩や愛を与えて

…

のような『For』の増幅や拡散もあるのかもね。単なる『For』の連鎖やリレー、お返し… だけでなく——」と瑠音。

「——」・・・「——なるほど。きっとそうだよ！

だからこそ、人類がここまで繁栄できたわけだし——。

なぜなら、仮に、みんながみんな身内の中だけで、本当に“単なる恩返し”や“単なる恩のリレー”だけをしていたなら、農業や工業、科学技術や医療… の広まりという形の『For』の増幅や拡散もなく、人類は、ここまで繁栄できていなかったはずだから」と僕。

「——フッ♪ そうね。

例えば、今のどこかの小学校の先生は、かつて小学生だったときに、当時の担任の先生から恩や愛を受けて、今は、その恩や愛を何十倍、何百倍にも増やして多くの子どもたちに与えている—— このことにも『For』の増幅や拡散があてはまるわ。

もちろん、これと似ている『For』の増幅や拡散は、歌手や作家、農家や漁師、学者やスポーツ選手、会社員や公務員、自営業者や経営者… の方々にも、きっと、あてはまるはずよ」

「アハッ。そうだね。

そういう、いわば“恩増幅社会”や“恩拡散社会”こそが、きっと、
 “そうあるべき&そうありたい”本来の社会の姿なんだよ。“単なる
 恩返し社会”や“単なる恩リレー社会”ではなくて——」

「そうね♪」

259

「——それに、もし『For』の増幅が全くなければ、そもそも、成
 熟 For Life が全く成り立たないようでもあるよ。

なぜって、単に“自分と相手の両方を喜ばせる”だけでも、その
 時点で、単なる恩返しや単なる恩リレーを超えた増幅が起きている
 ことになるのだから。——ああ、今初めて気づいたよ」と僕。

「アハッ♪ 私も♪

そう言えば、お姉ちゃんも話していたよ。子どもが元気で、とき
 に笑顔がこぼれるだけで、十分うれしくて満足なんだって——。

それは、お母さんも同じっぼい——。いろいろ口うるさいときも
 あるけど、基本的には、娘である私たちが元気で幸せでいてくれる
 だけで十分という感じで——」ほほ笑みながらの溜音。「親たちへ
 の恩返しよりも、まず、自分自身や次の世代に喜びや愛情をプレゼ
 ントしてあげてほしい。それだけでも十分恩返しになっているだけ
 でなく、そもそも、こっちは恩を与えた時点で十分に喜びを得てい
 るのだから、みたいな？

私も、将来、そう思えたらいいな——」

「それが、本来の“無償の愛”なのかもね。たとえ、外から無償に見えても、実際は、心の中で、ちゃっかり、ほぼ有償に匹敵するほどの報酬を受け取っていて——。

——“無償の愛”の正体、見破ったり！ みたいな？」

「フフフッ。そうよね。

——私、自作の詩や歌、あなたに喜んででもらうだけで、十分満足だったわ。これも、似たようなものかもね？

“無償の愛”というほど大げさじゃないけれど——」

「そうそう、わかるわかる。僕も、写真、君に喜んででもらうだけで、十分うれしい気持ちになっていたよ。これも、きっと同じだね。

アハッ」 僕は、部分的には似た者どうしでもあった？

「フフッ♪ そうね。

この気持ちは、本来、私たちや親だけでなく、教師、歌手や作家、農家や漁師、学者やスポーツ選手、会社員や公務員、自営業者や経営者… の方々も、きっと同じはずよ。

——だから、本来、単なる恩返しや、単なる恩リレーにとどまる必要なんて、さらさらないのよ」

「恩増幅や恩拡散も、ありなんだね？」

「——ありどころじゃないわ。だって、恩や恵みやフルーツや愛は、何十倍にも何百倍にも増幅できて、自分自身を含む多くの人へ広くとどまることができるんですもの♪」

「そうだね。そのおかげで成熟 For Life の実現も、自己実現——自己フルーツ化や自分らしいフルーツの現出も限りなくできそうだし——。

それに、例えばフルーツを提供してくれる植物も、フルーツを何
 十倍にも何百倍にも増幅させて広めているくらいだから、『For』の
 増幅や拡散は、決して、摩訶不思議なことでもで深遠なことでも特
 殊なことでもなく、自然で身近なことなんだね」

「ええ、そうね♪」

おん めぐ あい
 恩や恵みやフルーツや愛は

なんじゅうばい なんびゃくばい そうふく
 何十倍にも何百倍にも増幅できて

じ ぶん じ しん ふく おお ひと
 自分自身を含む多くの人へ

ひろ とど
 広く届けることができる

260

「この“いくらでも増幅^{ぞうふく}させたり、拡散^{かくさん}させたりできる恩^{おん}や恵^{めぐ}みやフルーツや愛^{あい}”の中に、さまざまな知恵^{ちえ}、技術^{ぎじゆつ}、工夫^{くふう}…も含まれて
いることを思い出せば—— 人類^{じんるい}がここまで豊^{ゆた}かに発^{はつてん}展^{てん}できたのも、
単^{たん}なる恩^{おん}返^{がえ}しや恩^{おん}リレーで終^おわらなかつたおかげであると、より納
得^{ぼく}できる」と僕。

「そうね。下^へ手に単^{たん}なる恩^{おん}返^{がえ}しや単^{たん}なる恩^{おん}リレーで終^おわってしまう
ことは、単^{たん}にもつたいないだけじゃなく、大^{おお}きな損^{そん}失^{しつ}なんだわ。
大^{おお}きな可^か能^{のう}性^{せい}やチヤンスを失^{うしな}ってしまうことだから——」と溜^る音^ね。

「そうだね。単^{たん}なる恩^{おん}返^{がえ}しや単^{たん}なる恩^{おん}リレーで終^おわらないことは、
きつと、多^た様^{よう}な人^{にん}間^{げん}社^{しゃ}会^{かい}レベ^{れい}ルのラ^{せいじゆく}イフ^{じつげん}が、成^{せい}熟^{じゆく} For Life を実^{じつ}現^{げん}し
て『Love - Love の関^{かん}係^{けい}』を構^{こう}築^{ちく}することによって健^{すこ}やかな全^{ぜん}人^{じん}類^{るい}
レベ^{たんじよう}ルのラ^{ひつよう}イフ^ふを誕^た生^{せい}させるためにも必要^{ひつよう}なことだよ。それは、多
様^{よう}な人^{にん}間^{げん}社^{しゃ}会^{かい}レベ^{れい}ルのラ^{おん}イフ^{めぐ}が、それぞ^おれの恩^{おん}や恵^{めぐ}みやフルー^{あい}ツや
愛^{あい}を、お互^{たが}いに増^{ぞう}幅^{ふく}、拡^{かく}散^{さん}させ合^あってこそ実^{じつ}現^{げん}すると思^{おも}う」

「——そうね」

「それに、単^{たん}なる恩^{おん}返^{がえ}しや単^{たん}なる恩^{おん}リレーで終^おわらないことは、きつ
と、人^{じん}類^{るい}を含^{ふく}む多^た様^{よう}な種^{しゆ}が成^{せい}熟^{じゆく} For Life を実^{じつ}現^{げん}して『Love - Love
の関^{かん}係^{けい}』を構^{こう}築^{ちく}しながら生^{せい}態^{たい}系^{けい}レベ^{れい}ルのラ^{なが}イフ^{そんぞく}として長^{ひつよう}く存^{そん}続^{ぞく}する
ためにも必要^{ひつよう}なことだよ。

それ^{じつげん}が実^{じつ}現^{げん}できるのは、まさ^{じんるい}に、人^{ふく}類^{ふく}を含^{ふく}む多^た様^{よう}な種^{しゆ}がもた^{しゆ}らす、
恩^{おん}や恵^{めぐ}みやフルー^{あい}ツや愛^{ぞう}の増^{ふく}幅^{ふく}や拡^{かく}散^{さん}があ^おつてこそだと思^{おも}う」

「——ウン。 ——。 ——え？」

261

海^{うみ}辺^べのキラキラがピークに達^{たっ}している——。

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky

「この生態系^{せいいたいけい}レベルのライフ^なが長く^{そんぞく}存続^たするためには、例えば、生態系^{せい}レベルのライフ^{たいけい}からたっぷり^{おん めぐ}“恩^{おん}や恵^{めぐ}みやフルーツ^あや愛^い”を受^うけとりながらスクスク成長^{せいちよう}してこれまで存続^{そんぞく}してきた人類^{じんるい}という種^{しゆ}も、何らかの“恩^{おん}や恵^{めぐ}みやフルーツ^あや愛^い”を増幅^{ぞうふく}、拡散^{かくさん}させて生態系^{せい}レベルのライフ^{けい}に与え^{あた}続けるべきだ^{つづ}ってことさ。例えば、果樹^たという植物^{かじゆ}が、何十倍^{しよくぶつ}、何百倍^{なんじゅうばい}というフルーツ^{なんびやくばい}を与え^{あた}続けているよう^{つづ}に——。

しかも、特に人類^{とく}という種^{じんるい}には、何千倍^{しゆ}、何万倍^{なんぜんばい}、何億倍^{なんまんばい}、何億倍^{なんおくばい}……という桁外れ^{けたはず}の“恩^{おん}や恵^{めぐ}みやフルーツ^あや愛^い”を提供^{ていきよう}できる可能性^{かのうせい}もある^{おも}と思うよ^{おも}」と僕^{ぼく}。

「え？ どういうこと？」と溜音^{るね}。

「健やかな全人類^{けんじんるい}レベルのライフ^{たんじよう}を誕生^{うえ}させた上で、前^{まえ}に話^{はな}した、生態系^{せいいたいけい}レベルのライフ^{ほうこう}の『アタマ』の方向^{そんざい}の存在^{せいいたいけい}——“生態系^{せい}レベルのライフ^{ずのう}の頭脳^{のうしんけいけい}、脳神経系^{せつきよくてき}”として積極^{かつやく}的に活躍^{けた}することが、桁外れ^{けたはず}の“恩^{おん}や恵^{めぐ}みやフルーツ^あや愛^い”の提供^{ていきよう}に相当^{そうとう}しうるってことさ。

例えば、隕石^た落下^{いんせきらつ}を予防^かするとか、急激^{ききうげき}な気候^{きこう}変動^{へんどう}を予防^かしたり改善^{かいぜん}したりするとか、公害^{こうがい}や砂漠^{さばく}化^かを含む^{ふく}生態系^{せいいたいけい}レベルのライフ^{けい}のケガ^{けが}や病氣^{びやうき}を治療^{ちりよう}するとかなんて、まさにそうだ^{おも}と思うよ^{おも}」

「あっ、なるほど——」

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky 262 に続く

262

「——ねえ。その生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の存在として提供できる桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”には、ほかに何があるかしら？

例えば、その中には、よりよい空気、よりよい水、よりよい土壌……つまり、よりよい環境が含まれるのは確かだろうけど」と溜音。

「その“よりよい環境”には、よりよい気温はもちろん、よりよい太陽光、よりよい風、よりよい雲…を含む、よりよいエネルギー循環はもちろん、それらをもたらししてくれる、よりよいアイデアとか、よりよい技術の開発とか、エネルギー循環についてのよりよい理解とかも、桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれると思うよ。

さらには、生態系レベルのライフのために働いてくれる、植物や動物などの営みを守ったり、積極的に支援したりすることも、桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれるはずさ。例えば、植林を進めたり、砂漠を緑地化したり…って、これらは結局“よりよい環境”であるだけでなく、“生態系レベルのライフの治療”でもあるんだけどね。アハッ」と僕。

「フッフ、そうね。そうすると、これらの“よりよい環境作り”や“生態系レベルのライフの治療”をより実現しやすくするような社会的なしくみ——よりよい“大学などの研究システム”はもちろん、よりよい“経済活動や行政、法律…”、それらを支えるような“一人ひとりのよりよい消費行動や投票行為”なども、間接的だけれど、きつと桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれるはずだわ。

「そうだね。

さらには、そういった生態系レベルのライフにも優しい人間社会
 レベルのライフを誕生させる一人ひとりの人間レベルのライフスタ
 イルを支えるような、よりよい知恵も桁外れの“恩や恵みやフルー
 ツや愛”に含まれているはずだよ」

「それは、よりよい知恵を広めたり、実践したり…を根底で支え
 てくださる方々の貢献も、桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に
 含まれるってことよね♪」

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky 263 に続く

263

「これらの多くは、人間社会レベルのライフの『アタマ』の方向の
 存在がもたらす桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”だね」と僕。

「そうね。人間社会レベルのライフの『アタマ』の方向の存在がも
 たらす、生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の存在としての
 桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”だから、まさに“重要部分中
 の重要部分”がもたらす“恩や恵みやフルーツや愛”だわ」と瑠音。

「——あ！人間社会レベルのライフの間で『Love - Love の関係』
 が構築されて健やかな全人類レベルのライフが誕生していれば、そ
 の健やかな全人類レベルのライフの『アタマ』の方向の人間社会レ
 ベルのライフの『アタマ』の方向の存在がもたらす、生態系レベル
 のライフの『アタマ』の方向の存在としての桁外れの“恩や恵みや

フルーツや^{あい}愛”になる」

「えー！？」

——^{すこ}健やかな^{ぜんじんるい}全人類レベルの^{たんじょう}ライフが誕生していれば、ここにあら^{おん めぐ}る“恩や恵みやフルーツや^{あい}愛”は、“^{じゅうよう ぶ ぶんちゅう}重要部分中の^{じゅうよう ぶ ぶんちゅう}重要部分中の^{じゅうよう ぶ ぶん}重要部分”がもたらす“^{おん めぐ}恩や恵みやフルーツや^{あい}愛”だっていうこと？」

「そういうことになるね」

「すごい♪」

それはそれは、すこぶるフルーツフルなデートだった。

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

264

そして、^{だいがく}大学3^{ねん}年の^{しょ か}初夏——

音楽イン ♪ 夏 Summer

^{る ね ぼく}瑠音と僕は、ふたりして^{き せい}帰省した^{おり}折に、それらの^{せい か}成果をおじいさんに^{つた}伝えるべく、^{いっしょ}一緒に^{みさき}岬へと^む向かった。

ここらあたりに、“^{きょくきょく}究極の^{い み}意味”の^{こた}答えがあるだろう。

そのように^{み こ}見込みながら——。

けれど、^{みさき}岬に着いてみると、そこに、おじさんの^{すがた}姿はなく、^{て がみ}手紙が置いてあるだけだった。その^{て がみ}手紙には、おじいさんは^{いま}今も^{げん き}元気で、^{あい か}相変わらず^{こうかい}航海には^{ちゅう}まり中であることが^か書いてあるだけだった。

^{ほんとう}本当に^{げん き}元気ならいいんだけど・・・

音楽フェード・アウト ♪ 夏 Summer

265

帰省を終えて、いつもの大学生生活に戻った僕は、これまでの成果を、ある教授に話してみることに決めた。この教授の講義が一番好きだったし—— 彼は、最も尊敬する教授の一人だった。

「おお！ すばらしい！

——シンプル！ クリアー！ エレガント！

ミーニングフル！ ユースフル！ フルーツフル！

——さぞ、興奮したでしょう。いいなあ。私も、一生に一度は、このような成果を生み出してみたかったですなあ。

——ぜひ、一緒に喜ばせておくれ」と教授。

「——あ、ありがとうございます」と僕。

「もちろん、君の業績です。君の名前で、堂々と発表したまえよ。

全面的にバックアップしようぞ。ふあつふあつふあつ！」

「いえ、でも—— 新しいことが何もないような」

「いえ。君は、コッホ曲線という具体的なフラクタル幾何、および、

フラクタルの概念を通じて—— “さまざまな分野”と“身近な人

生”の間にある共通点を見いだしながら、自然 nature に対する見

方をバージョンアップさせています。

つまり、誰もが漠然と思い描いていて、はつきりつかみきれてい

なかった自然観を、誰もが目で見て直観的に理解できる形、共有で

きる形に表現しています。

これは、今まで、まだ誰もやったことのなかった画期的な業績ですぞ」

「——はあ。まあ——。でも——」・・・「間違えているかも」

「私を含め、誰もが、ときには間違えてしまう—— そのような存在です。なぜなら、誰もがみな、生身の人間ですから」

「——」

「間違いに気づきうるからこそ、本物なのですぞ。」

すこぶる健全な営み——」

「——」

「それに何より、この学問、いえ、あらゆる学問の土台となりうる新たな自然 nature についての知を愛する営み——新たな自然知愛 natural philosophy、および、新たな自然知愛原理 principles of natural philosophy は、単に間違えているにしては、あまりにも調和的すぎる」

「——知愛？」

「哲学と訳されることが多かった philosophy の新しい訳です」

「——僕は、哲学を学んでいませんし、哲学をしているつもりも、全然ありませんでした」

「ふあっふあっふあっ。知らず知らずに、ほとんど0からやっていたからこそ、まさに、本来の philosophy、知愛なのですぞ」

「——」 . . .

266

「君の、この成果は—— “従来の学問や教室の、伝統やしがらみ…から距離を置く、自由な立場の君” だったからこそ、生まれたのか

もしれないですね。そのことは、決して^{けっして}引^ひけ目^めに感^{かん}ずるべきことでなく、^{じつ}実は、すばらしい^{みりょく}魅力^{りき}の1つなのですよ。

——もっと、自信^{じしん}を持^もちたまえ。ふあっふあっふあっ！」

「——。はあ——」・・・

「7つの^{わく}ワクワク^ざ枠^{せブン}、The 7 Frames For Life——これは、^{ひと}人が生きるためにな^がったり、^{がくもん}学問^{おうえん}を^お応^え援^{えん}してくれたりするだけでなく、^{ひろ}広^{やくだ}く役^だ立つでしょう。

つまり、何^{なに}よりの^{みりょく}魅力^{りき}の1つは、この^{おうようはんい}応用^{ひろ}範囲^いの広^{ひろ}さなのです。

これは、^{ぶん}文化^かを越^こえ、^{げん}言語^ごを越^こえ、^{しゃかい}社会^こを越^こえ、^{せいぶつしゆ}生物種^こを越^こえ…
^{おうよう}応用^{ふへんてき}できる^{どだい}普遍的な土台^{どだい}です。

あらゆる^{がくもん}学問^{せいたいげんしやう}、あらゆる^{しゃかいげんしやう}生態現象^{しゃかいげんしやう}、あらゆる^{にんげん}人間の^{いとな}営み^{せいめいげんしやう}、あらゆる^{かがくげんしやう}生命現象^{かがくげんしやう}、あらゆる^{ぶつり}物理^{げんしやう}現象^{きやうつう}…が、この^{きやうつう}共通^{どだい}の^{りやう}土台^{せつめい}を利用して説明^{せつめい}されうということ——
^{じんるい}人類^{ふへんてき}は、かけがえのない“普遍的な^{ふへんてき}メタ・パラダイム”に相当^{そうとう}する
フレーム、すなわち、^{ぐたいてき}具体的^{づく}な^{やくだ}パラダイム^て作^てりに役^{やくだ}立つ^てツール^てを手^てに入^いれたのです。むろん、それは、この^{ちきゅうじやう}地球^{ちきゅうじやう}上の^{そうつう}ライフ^{そうつう}みんなが手^てに入^いれたも^{どうぜん}同然^い——」

「——」・・・

267

「この“普遍的な^{ふへんてき}メタ・パラダイム”に相当^{そうとう}しているフレームは、
みんなが^{すす}進^{こうろ}んでいる^{まちが}航路^{おし}が間違^あっていないかどうかを^{おし}教^{おし}えてくれる、

まさにコンパスを^{ていきょう}提供できるフレーム、^{コンパセイブル}compassable framesです。

また、例えば、ある人間社会^{たと にんげんしやかい}の営みの是非^{いとな ぜ ひ}についての判断^{はんだん}を助け
てくれたり、ある人間社会^{にんげんしやかい}の存在意義^{そんざい い ぎ}を明確^{めいかく}にしてくれたりするた
めのツール^{つか}としても使えるでしょう」

「——」

「君は、とても意味あることを成し遂げたのですぞ。胸を張りたまえ」

「——。あ、でも、僕は、ただの学生で、専門家でないですし——」

「ふあっふあっふあっ！ 専門家^{せんもん か}でなければ学問^{がくもん}してはならないと
でも君は本気で思っているのですかな？」

もちろん、専門家^{せんもん か}、スペシャリストも今後^{こんご}とも重要な存在^{じゅうよう そんざい}であり
続け、専門家^{せんもん か}にしかできない学問^{がくもん}があり続けます。

しかし、一方で、非専門家^{いつぽう ひ せんもん か}、ジェネラリストも重要な存在^{じゅうよう そんざい}であり
続け、非専門家^{ひ せんもん か}にしかできない学問^{がくもん}もあり続けるのです」

「——。はあ——。でも、この7つのワクワク梓自体は、もともと、
おじいさんが^{おし}教えてくれたものでして——」

「おじいさん？」

「はい。地元^{じもと}に住んでいる“実^{じつ}の祖父^{そふ}が曾祖父^{そうそふ}”のような存在^{そんざい}の方^{かた}
です。彼は、今^{かれ いま}、航海^{こうかい}に出ているらしく—— どこにいるのかも、
わかりません」

「——そのおじいさんの年齢^{ねんれい}は、わかりますか？」

「えっと、おそらく—— 今^{いま}は、少なくとも、80歳^{さい}から90歳^{さい}くら
いじゃないかと——」

「——。——うん。ぜひ発表^{はつひよう}しなさい。君^{きみ}の言葉^{ことば}で—— 君^{きみ}の名
前^{まえ}で——。きっと、そのおじい様^{さま}も、とても喜ばれることでしょう」

268

だいがく ねん しょしゅう
大学3年の初秋——

音楽イン ♪秋 Autumn

その発表が、数日後に迫っていた。

それは、僕にとって全く初めての経験で、漠然とした不安が僕を
包み込んでいた。

瑠音と僕は、キャンパス内の、木の葉がわずかに色づき始めてい
る並木道を歩いていた。

「どうしたの？」心配してくれる瑠音。

「え？」思わず聞き返す僕。

「だって——元氣ないみたいから——」

「ああ——」

音楽 ♪秋 Autumn 269 に続く

269

瑠音と僕は、その並木道沿いにある、木陰のベンチに座った。

結局、その不安を彼女に打ち明けることにした。

「その発表——何となくコワイんだよ」と僕。

「え？ どうして？」と瑠音。

「——。だって、大勢の見ず知らずの方々の前で発表するのは、
何となく不安で緊張するというか——この成果が、かつて夢とし

て想い描いていたような学問そのものではなく、学問の土台となる
 新たな知を愛する営み——新たな natural philosophy、新たな自然

知愛とかに相当しているって言われて戸惑っているというか——

それに、何より、もし間違えていたらって思うと——」・・・

「自信ない？」

「自信は——」・・・「——ある。いや、ない。いや、ある。

いや、ない—— いや」

「フッフ。

——“間違えているにしては調和的すぎる” そんなふうに教授に
 言っていたんだんでしょ？」

「——あ、でも、“私も生身の人間だから間違える”って、応援して
 くださっていた教授自身が話していたんだぜ!？」

「——フッフッ」

溜音は、それから、しばらく葉っぱを眺めた。

そして、ふいに口を開いた。

「間違えるって、そんなに悪いこと？」

「え？」

「仮に、もし、どこかの間違いに気づいて“イヤだな、悪いな”と思
 う部分を見つけたのなら、“いいな、好きだな”と思えるまで、
 その部分を改善すればいい—— それだけの話じゃないかなあ。

そうやって、バージョンアップを重ね続けられればいいのよ」

「——」

「もちろん、間違えない努力も、とても重要なことよ。

でも、それと同じくらい、いえ、それ以上に重要なことは——

「間違いに気づこうとする態度」と「気づいた間違いをどう活用するか」じゃないかしら？ その方が、結果的に、より真実に近づけるはずだし——」

「——」

「それに—— これは“生きる力”、自分を生かす力と一緒に、ほかならぬ第7フレームが教えてくれる、すてきな知恵の1つでしょ？」

「——うん。まあ——」

「責任を持って対応し続けられればいいのよ。」

まさに愛し続けられればいいの——。これまで通り、これからも。

——きっと、成熟に向かっているライフにとっては、間違いは通過点にすぎないのよ。間違いをうまく活用できれば、それだけ、よりよく改善できるんですもの」

「——」

「それに——」

「それに？」

「——ううん。何でもない」 瑠音は視線を外しながら言った。

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

270

心地よい、そよ風が、瑠音と僕を時折包み込んでいた。

——しばしの沈黙を破り、僕は口を開いた。

「確かに、君の言う通りだよ。もし、間違いをうまく活用できれば、

かいぜん
改善につながる——」・・・「ただ——」

「ただ？」と聞き返す瑠音。

「うん。ただ、結局は——僕自身の心の中のハードルも含めて、
いろいろなハードルを自分の力でコツコツ乗りえなきゃ始まらない
のかもね。

何だかんだ言っても、結局は、自分の力で、一步一步、坂を上り
つづ 続け、それを乗り越えなければ、何にも始まらないのかも——」

「——」

かのじょ なに い
彼女は何も言わないまま、しばらくの間、ぼんやりと遠くを眺め
つづ 続けた。

271

「——フッ」 瑠音は、ふいに笑い出した。

「え？ どうしたの？」と思わず尋ねる僕。

「ねえ、覚えてる？」 瑠音は明るく尋ね返した。

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

「え？ 何を？」

「高校生のとき、私が、毎朝、あの上り坂を、自転車を引きながら
ある 歩いていたこと——」

「ああ、覚えているよ」 忘れるわけがなかった。

「どうして、いつも、ああしていたか知ってる？」

「——え？ やっぱ、体力に自信がなかったからとか、しんどかつ

たからとかじゃない？」

「そう。それも、^{たし}確かにあったわ。でも—— ^{じつ}実は、ほかに^{りゆう}理由があったの」

「——どんな^{りゆう}理由？」

「——うん。^{わたし}私—— ^ああなたに会えたからなの。

ほんの^{いつしゅん}一瞬だけだね。アハッ。——^{まいあさ}毎朝、ああして、^{じてんしゃ}自転車
^ひ引いていると、あなたとふたりきりで会える^あ確率が^{かくりつ}グリーンと^{たか}高まる
ことを^{はっけん}発見していたのよ」

「え？」 ^{いがい}意外だった。

「私—— ^{まいあさ}毎朝、あなたに、あいさつしてもらえるのが、^{うれ}すごく嬉
しかった——」 ^{かのじょ}はにかみながらの彼女の^え笑みがコスモスのように
^{いろ}色づいているのがわかった。

「——」

「だからといって、^{きょうしつ}教室とか、^{ろうか}廊下とかじゃ、ふたりきりになれる
はずもなかったし—— ^{ころ}あの頃、そういうのって、なかなか^は恥ずか
しかったじゃない？ だから—— ^{わたし}あれは—— ^{たの}私が、それを^し楽し
みにしながらやっていたことなのよ。——アハッ♪ ^いそう言う^い意
^み味では、^{わたし}私、^{さか}坂を^{のぼ}上るのも^す好きだったのかもね？」

「——」

「——あれ？ ^{わたし}私、^{はなし}なんで、こんな^{はじ}話、^{はじ}始めたんだっけ？」 ^{はにか}はにか
^{るね}みながら、^{とまど}溜音は、しばらく戸惑った。

音楽フェード・アウト ♪心地よき日々 Comfortable Days

「あ、そうそう、そうよ。だから、あなたが、^{いま}今、^{かん}そのような^{かん}感じ
で“しんどい^{さか}坂”を^{いっ ぽ いっ ぽ}一歩一歩上っている^{あいだ}間にも—— ^{なん}きっと、^{なん}何ら

かの^{よろこ}喜びとか^{たの}しみとか^みを見いだせるかもしれないよってことを
言^いいたかったのよ」

「——」

「——それに、誰^{だれ}が何^{なん}と言^いったって、私^{わたし}は、あなた^みの味方^{かた}よ。ずつと——。

わたしが、——愛^{あい}しているから。

これまでのあなたも、これからのあなたも——。

——だから、余裕^{よゆう}よ。アハッ♪」 瑠音^{るね}は明るくほほ笑^{あか}んだ。

このとき、彼女^{かのじょ}の愛^{あい}がフラッシュバックした。

音楽イン 後半のサビの部分から ♪秋 Autumn

校舎内^{こうしゃない}を水着姿^{みずぎすがた}のまま走^{はし}る瑠音^{るね}——。

その後^ごも、いつもと変^かわらずあいさつする瑠音^{るね}——。

自転車^{じてんしゃ}を押^おして走^{はし}る瑠音^{るね}——。

「きっと、本屋^{ほんや}さんに行^いってみるといいよ」とアドバイスする
瑠音^{るね}——。

「——おーい！」と、赤^{あか}ちゃんを抱^だっこしながら励^{はげ}ましにくる
瑠音^{るね}——。

「大好き^{だいす}いー!!」と、海^{うみ}に向^むかって叫^{さけ}ぶ瑠音^{るね}——。

再び^{ふた}目^めを閉^とじる瑠音^{るね}——。

「もう、本^{ほん}当^{とう}に、がんばり屋^やさんなんだから——」と言^いいながら
赤^{あか}ちゃんコンパルンクルを引^ひき受^うける瑠音^{るね}——。

「そんなあなた^すが—— 好^しき」と支^し持^じする瑠音^{るね}——。

「すごいことよ。きつと大^{だい}発^{はっ}見^{けん}よ！」と褒^ほめる瑠音^{るね}——。

...

そして――

「誰^{だれ}が何^{なん}と言^いったって、私^{わたし}は、あなた^みの味方^{かた}よ。ず^{はげ}っと――」と励^{はげ}ます瑠音^{るね}――。

瑠音^{るね}の笑顔^{えがお}が、声^{こえ}が、ことば^{やさ}が、優^{やさ}しさが、心^{こころ}が……

彼女^{かのじょ}のすべて^{ひようげん}が、表現^{うつく}できない美^みしさに満^みちあふれているように感じ^{かん}られた。

彼女^{かのじょ}がいとおしかった。

彼女^{かのじょ}の存在^{そんざい}が奇蹟^{きせきてき}的に感じ^{かん}られた。

このとき初^{はじ}めて―― 瑠音^{るね}が自分^{じぶん}以上^{いじょう}に大切^{たいせつ}な、この上^{うえ}ない宝^{たから}であること^{じつかん}を実感^{そんざい}し、その存在^{こころ}に心^{かん}から感謝^{しや}した。

このとき―― “しんどい坂^{さか}を上^{のぼ}る過程^{かてい}での喜^{よろこ}び”^{じゅうぶん}を、十分^{じゅうぶん}すぎるほど、すでに見^みいませ^きた気がした。

音楽終了 ♪秋 Autumn

272

いよいよ、生^うまれて初^{はじ}めての研究^{けんきゅう}発表^{はつひよう}の当日^{とうじつ}――。

その日^ひは、ち^かょうど、彼女^{かのじょ}にとつての大^{たい}切^{せつ}な試^し験^{けん}の日^ひと重^{かさ}なってしま^はっていたので、瑠音^{るね}は発表^{はつひよう}会^{かい}場^{じょう}に來^こられなかつた。

瑠音^{るね}と僕^{ぼく}は、お互^{たが}いの成^{せい}功^{こう}を祈^{いの}り、お互^{たが}いに“手^て作^{づく}りのお守^{まも}り”^{こうかん}を交換^あし合^あっていた。

それでも、演^{えん}台^{だい}の上^{うえ}に立^たった僕^{ぼく}は、えら^{きん}く緊^{ちん}張^{ちやう}していた。

おそらく教授が宣伝してくれたからか、会場は多くの人たちで
あふれ返っていた。

それでもシーンと静まり返っている会場——
注がれる多くの視線—— バクバクと高鳴る鼓動——

僕は、ポケットの中の—— 彼女のお守りをぐいと握りしめ、
それから、おじいさんの丸い石“アインシュタイン”を軽くなでた。

そのときだ。キラリが目に入ったのは——

！！！！

その輝きの正体に僕は歓喜した。

なんと、笑みを浮かべているおじいさんが観客席で両手を振っ
ているではないか！

音楽イン ♪美しき自然 Beautiful Nature

ああ、元気だったんだあ。そして、来てくれたんだあ。
——ありがとう。ありがとう。

涙が、にじみかけた。

おじいさんは、片方の手で自身の頭ををなでながら、もう片方の手
の親指を上になでたまま前後に動かしていた。

こんなにおちゃらけているおじいさんを初めて見た。

ゆったりと深い腹式呼吸を繰り返した僕は—— 気持ちが落ち着
いた状態で口を開いた。

ほほ笑みながら——。

「——この発表を、地元の偉大なおじいさんへ捧げます」

かいじょう すこ
会場が少しざわめいた。

おじいさんは両腕^{りょううで}いっぱい大きな円^{えん}を空中^{くうちゅう}に描き始めた。

「——もちろん、この会場^{かいじょう}にいらして下さった皆様方^{みなさまがた}へも」

うなずきながらジェスチャーを繰り返^くし続^{かえ}けるおじいさん。

——え？

「あ、それから—— それから—— できれば、これからも力^{ちから}を合
わせながら、ずっと一緒^{いっしょ}にライフをエンジョイしたい愛^{いと}しい人^{ひと}へも
捧^{ささ}げます」

うなずきながらジェスチャーを繰り返^くし続^{かえ}けるおじいさん。

「それから、それから——

しんゆう
親友や——

あいけん
愛犬や——

はぐく さき かぞく
育み支えくれた家族たち——

やさ はげ しんせき
優しく励ましてくれた親戚たち——

せ わ せんせいがた
お世話いただいた先生方——

おお じ かん す なか ま
多くの時間をともに過ごしたクラスの仲間たちへも——

ここにおられない、すべての方々^{かたがた}たちへも——

さまざまな知恵^{ち え}や勇気^{ゆう き}を与えて下さった、本^{ほん}の著者^{ちょしや}の方々^{かたがた}
も——

さまざまな感動^{かんどう}や楽^{たの}しみを与えて下さった、あらゆる作品^{さくひん}の

たんじょう きさ かたがた
誕生を支えて下さった方々^{かたがた}へも——

...

けんめい いま い かたがた
懸命に、今を生きている方々たちへも——

ここまで僕らを育ててくださった、過去を生きの方々へも——

かぎ か のうせい みらい い かたがた
限りない可能性があふれる、未来を生きる方々へも——

しゅっしん ち せ だい じ だい ねん だい せい べつ がっこう しょくぎょう
出身地も、世代も、時代も、年代も、性別も、学校も、職業も…
あらゆる肩書きの壁を乗り越えて——

すべてのライフへ——

けい い かんしゃ こ
敬意と感謝を込めて——」

音楽 ♪美しき自然 Beautiful Nature 273 に続く

273

ち きゅうじょう み ご と ぜつみょう せいたいけい なか じんるい おん めぐ
「この地球上の見事なまでに絶妙な生態系の中で、人類が、恩や恵
みやフルーツや愛を受けとる一方—— そのような時代は、すでに
お
終わりました。

なんじゅうおくねん れき し かか ち きゅう
この、何十億年もの歴史を抱える地球——

さいこう せき さいたいけい なか おん めぐ
その最高傑作である美しい生態系の中で、恩や恵みやフルーツや
あい う と いっぽう じんるい ほう せつぎよくてき あた
愛を受け取る一方ではなく、われわれ人類の方からも積極的に与え
ていく—— そのような時代が、もうすでに始まっています。

もはや――

過剰^{かじょう}な“ストレス^{むりよくかん}や無力感^{かじょう}”、過剰^じな“自己中心性^{じこちゅうしんせい}や自己喪失^{じこそうしつ}”、
過剰^{かじょう}な“悲観^{ひかん}や楽観^{らっかん}”… に振り回されるままに、“方向音痴^{ほうこうおんち}”状態^{じょうたい}
に陥^{おちい}っている場合^{ばあい}ではありません。

たゆまぬ謙虚^{けんきょ}さを通じて、自然^{しぜん} nature との調和性^{ちやうわ}を高めること
を探究^{たんきゅう}し続ける^{つづ}営み^{いとな}の数々^{かずかず}に――

たゆまぬ改善^{かいぜん}を通じて、各方面^{かくほうめん}で芽生え^{めぼ}、育ち^{そだ}続けている^{つづ}、すば
らしい発展^{はってん}の数々^{かずかず}に――

たゆまぬ恩^{おん}や恵み^{めぐ}やフルーツや愛^{あい}の増幅^{ぞうふく}と拡散^{かくさん}を通じて、健やか^{すこ}
な全人類^{せんじんるい}レベル^{たんじょう}のライフ^{かてい}が誕生^{かざかず}する、その過程^{かてい}の数々^{かずかず}に――

…

ゆるぎない支持^{しじ}こそが、与えられ^{あた}続ければよい^{つづ}なと思^{おも}います。

この地球^{ちきゅうじょう}上の生態系^{せいたいけい}レベル^{せいたいけい}のライフ^{ライフ}のために――

さらなる恵^{めぐ}み^{あた}を与える

知識^{ちしき}や知恵^{ちえ}が

意志^{いし}や意欲^{いよく}が

そして、その実^{じつ}際^{さい}の営^{いとな}みや成^{せい}果^かが

今後^{こんご}とも大^{おお}いに育^{はぐ}まれる――

その“フルーツ育^{そだ}て”と呼^よべるプロセ^{うなが}スが促^{うなが}されるために、この
発表^{はっぴよう}が少^{すこ}しでも貢^{こう}献^{けん}できれば、とてもうれし^{うれし}いです。

この広い宇宙の中で、もしかしたら、すでに存在しているかもしれない、ほかの天体生態系レベルのライフのためにも——」

一瞬、コンパース一家の姿が心に浮かんだ。

「もしかしたら、将来、われわれが誕生させられるかもしれない、新たな天体生態系レベルのライフのためにも——

この地球生態系レベルのライフのためにも——

一瞬、丸みを帯びた地球の姿が心に浮かんだ。

地球上の多様な種、個体社会レベルのライフのためにも——」

一瞬、ランプベリーの姿が心に浮かんだ。

「将来、ぜひ誕生してほしい、健やかな全人類レベルのライフのためにも——

多様な人間社会レベルのライフのためにも——

...

多様な人間レベルのライフのためにも——

見知らぬ誰かのライフのためにも——

身近な誰かのライフのためにも——

親友のライフのためにも——

一瞬、心笑君の笑みが心に浮かんだ。

恋人のライフのためにも——

一瞬、瑠音の笑みが心に浮かんだ。

家族のライフのためにも——

じぶん じしん
自分自身のライフのためにも――

...

みんなのライフのためにも――

さいぼうしゃかい
細胞社会レベルのライフのためにも――

さいぼう
細胞レベルのライフのためにも――

...

せいたいこうぶん し しゃかい
生体高分子社会レベルのライフのためにも――

せいたいこうぶん し
生体高分子レベルのライフのためにも――

...

けんこう
健康のためにも――

め さき しょうらい
目先の将来のライフのためにも――

なが しょうらい
長い将来のライフのためにも――

か こ にな かたがた
過去を担った方々のライフのためにも――

みらい にな こども
未来を担う子供たちのライフのためにも――

いま にな わたし
今を担う私たちのライフのためにも――

For Life――

For “『In』 & 『Out』”――

ち え じつげん
この知恵の実現のために、

この発表が少しでもお役に立てれば、
何十倍、何百倍もうれしいのです」

おじいさんの笑みが見える——。
自身の笑みが感じられる——。
みんなの笑みが感じられる——。

やっぱり、ワクワク枠だぜ！
やっぱり、フレー！ フレー！ フレームだ！
そうだよね？ おじいちゃん。

音楽そのままエンドロールへと続く
♪美しき自然 Beautiful Nature

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For Life

みんなのコンパス③

第7フレーム

『  』

【完】